
Bitter Sweet Chocolate Coffee

高梨伊織

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Bitter Sweet Chocolate Coffee

【Nコード】

N3857G

【作者名】

高梨伊織

【あらすじ】

生徒を一途に想う若くて人気者の先生。生徒に恋することを人一倍嫌う上司の先生。真反対な二人の教師の甘く苦く切ない恋愛を描く物語。

0 . 断片 - Memory -

「煙草一本頂戴」

口が寂しくなつたので部下から止めた筈の煙草を貰った。
その煙草に火を点けようとした瞬間だった。

「愛の表現技法は多種多様すぎる。愛を言葉で表現する人もいるし、感情で表現する人もいる。

だが、中には嫉妬で表現したり、肉体や性欲で表現する人もいる。
だから、愛は難しいんだよ。」

あの人が切なげな表情で煙草を吸いながら言った一言を思い出した。
俺はやっぱり吸うのを止めて部下に煙草を返した。

煙草を見ればしばらく会っていないあの人のことを思い出した。
あの人は今どうしているのだろうか。

「……………雨か」

頬に雨の滴が当たった。久々の雨だった。

鞆から傘を取り出し、折りたたみ傘を開こうとした瞬間だった。

「俺は必ず君を守ることとつか君に想いを告げることも決めていたんだ。

なのに俺は君を守ること、君に想いを告げることさえも出来なかったじゃないか！」

土砂降りの雨の中、あの奴は泣きながら言った叫びを思い出した。

俺はただ雨が落ちていく様子を見つめていた。

雨の日になるとあの奴のことを何故か思い出してしまう。

あの奴は元気でいるのだろうか。

「手紙だ」

部屋を整理していると手紙が出てきた。

俺は封筒を開けて、読み始めた瞬間だった。

「先生にとっては当たり前のことをしたのかもしれない。あんな態度取ったけどね…」

私は本当はあの時嬉しかったの！ だから、その…ありがとう」

昔も今も変わらぬ達筆な字で君は俺に手紙をくれた。

実はこの一言は俺も嬉しかったんだ。だから、残していたんだと思う。

俺は君を守れていますか。

「……フフ」

テレビを見ていると俺が好きなお笑い芸人が出てきた。

そのお笑い芸人がネタを始めた瞬間だった。

「私と先生はこのお笑い芸人がいなかったらこんなにも仲良くなつてないと思うの。」

私と先生がこのお笑い芸人が好きで、それでいて出会った確率って凄いと思わない？」

君は俺に笑顔で言った一言を思い出した。

俺も言われてみれば凄いと思ったんだ。

君は今でも幸せに笑っていますか？

「……やつとか」

美容師さんが髪の毛をくしで梳かれてていた。

そして、私は鏡を見た。

「君が寂しいって言えば俺は聞いてあげる、君が辛いつて言えば俺が楽にしてあげる。」

俺は君を守りたい。嫌、必ず俺が守る。何故なら君を愛しているからだよ」

貴方が見たことのないような真剣な眼で言った一言を思い出した。

私は貴方がまた好きになったの。

私は何度、貴方に恋するんだろうか。

この物語は甘く苦く切ない物語である。

1 . 罪心 - Cold eyes - (前書き)

第1章 - 罪と、恋 -

- | | | | |
|-----|----|---|-----------------|
| 1 . | 罪心 | - | Cold eyes - |
| 2 . | 写真 | - | Piece - |
| 3 . | 理解 | - | Absurdity - |
| 4 . | 意味 | - | Straight eyes - |

1・罪心 - Cold eyes -

しかし……しかし君、恋は罪悪ですよ。解っていますか。
by 夏目漱石「ころ」

高校時代、国語教師の川居聖は夏目漱石のころを^{かわい ひじり}読んだ。
高校生の俺に1番重く胸に響いたのが先生が主人公に言つたこの一言だった。
その一言が残っているのは高校生の時の俺では分からなかった。ただ、今の24歳の俺なら分かる。その意味も、響いた理由も。何故なら、現に俺の今の恋が罪悪だからだ。

「川居先生、渚がね…『先生字汚い、習字教える資格ないしー』って言つてたで」

「えっ、ホンマ？奥田^{おくだ}って裏ではそんなこと言ってるんかー…怖っ！」

「信じんといてや、先生！」

ちよっといじられて困っている生徒がいた。

彼女の名前は奥田^{おくだ}渚^{なぎさ}、明るくて優しくて天然な生徒だ。

そして、俺の……好きな人である。

最初はただ素直で勉強熱心な子で良い子だなんて思っていた。けど、それは次第に違う感情に変わっていった。

「ふー今日も授業終わったー」

「やつとやな……疲れた……」

「けど、今から職会……」

この二人は仲の良い教師同士だった。

こっちの童顔は朝倉望、同じ3年生担当で教科は英語だ。通称『ノゾ』だ。

で、こっちの眼鏡さんは楠木新、2年生担当で教科は社会で通称『新さん』だ。

今日の会議は図書室だ。吹奏楽部の練習が此处からでも見える。

「奥田おるやん、よかつたなー聖」

「ちゃんと会議は聞けよ」

と笑いながら言われた。

まもなく、4時。会議が始まるようだ。

「今から会議を始めたいと思います……今日は……」

聞かなければならない先輩教師達の話聞いていたが目線は吹奏楽部だった。

フルートの音色綺麗だな……あんなに楽器の音色って綺麗だったっけ……？

部活の時は眼鏡なんだ。何か雰囲気変わるな……

気づけば会議が終わっていて、話の三分の一しか聞いていなかった。

「はい、聖、ちゃんとメモしてあげたからな」

「サンキュー、本当に助かってます」

「ちゃんと聞けよな」

いつもこうやってノゾに助けられて、そうして、それに新さんがツッコミを入れるのが俺たちのスタイルだった。

「奥田どうやった？」

「眼鏡似合ってた」

「お前、ホンマ幸せやな」

いつもこうやって奥田の恋の報告をするのが定番だった。

俺の話の半分、もしくはそれ以上は奥田で埋め尽くされていた。

「ガラガラ…」

と職員室のドアが開いた。

体育教師の岡藤さんが出張から帰ってきたようだ。

「今日も怖いよな…」

「目つき悪くて近寄りがたい…」

この二人が言うように岡藤さんはそんな人だった。

おかふじりゅう

岡藤龍さん。

体育教師なのに見た目だけ体育教師だ。

眼が鋭くて、目つきが悪い。しかも、無口で無愛想で無表情。

笑った顔なんて全く見たことが無かった。

そして、岡藤さんは自分の座席に座り、明日の授業のことについて考えているようだ。

周りを見渡すと教師の数も少なくなっていた。

「なあなあ、奥田の魅力ってなんや？」

「そりゃ素直なとこやろな」

「ふーん・・・やっぱ、生徒が好きでもちゃんと恋はするんやな」

「当たり前だ」

って言った瞬間だった。

『バン！』

机を叩く物音が聞こえた。その音は岡藤さんが叩いた音だった。そして、岡藤さんは俺の胸倉を掴んだ。

周りの数少ない先輩教師達も驚いていた。

「お前がどれだけ罪悪なことをしてんのか分かってるのか！」

と滅多に叫ばない岡藤さんが叫んだ。そして、真剣に怒っていた。突然、グーで頬を殴られてしまった。

「生徒に恋しても残るのは傷だけだ」

そう言つて、岡藤さんは場を後にし、帰っていった。

何とも言えない痛みだけが残っていた。

「大丈夫か？ 聖」

「何もあそこまでしなくても…」

「川居君、早く手当てしよっか」

と理科担当の石崎さんと一緒に保健室に行った。

ただ、気になることがあった。

「生徒に恋しても残るのは傷だけだ」という言葉の意味だ。

何故、岡藤さんがそう言えるのかが不思議だった。

そして、殴った後の眼は何処か悲しそうな眼であった。

その言葉の意味を理解するのは、随分後のことだった。

2・写真 - Piece -

バラが刺の中に咲くように、恋は怒りの中に咲いて燃える。
by アルント

「痛そうだね、驚いたでしょ？」

「はい、凄く痛いです…」

「だって、ずっとバスケットをしてる手だもんね、凄く手硬いもんね」
この人は石崎茜^{いしざきあかね}さん。同じく三年生担当で理科担当である。

「あれでもね、昔はとても明るくて優しく、熱血で…例えば言うと川居君みたいな先生だった」

と手当をしながら石崎さんは言った。

あの岡藤さんが俺みたいな教師だったとか想像もつかない。

「けどね、あることを境に岡藤さんは変わったの」

「そうなんですか…」

「そっぴゃ、お気に入り生徒がいたな…見る？」

「あつ、はい！」

保健室を出て、職員室の資料室に入った。

石崎さんは39期生の見出しを見つけ、何かを探していた。

すると『39期生 卒業式』と書いてあるフォトアルバムを取り出した。

「見せたことは秘密だからね！」

そうして開いてみるとその39期生の写真がいっぱいあった。

すると泣いている生徒、泣くのを堪えている先生、寄せ書きを貰うと笑う先生…

感極まって泣いている石崎さんの写真もあった。

何よりちょっと泣いている岡藤さんの写真は意外だった。

そして、生徒同士の写真や生徒と先生と一緒に写っている写真がい

っぱいあった。

「この子だよ、この子！」

と言って指差した写真は笑顔の岡藤さんとお気に入りの子が写っていた。

その子はどこにもいるような黒髪ロングの子で別にこれといって特徴もなく、地味な女の子だった。

「この子ですか？」

と俺はつい再度確認してしまった。

俺の想像では活発な女の子が気に入るそうだなと思っていた。それが意外と真面目でしっかりしてそうな女の子だった。

「そうよ、この子よ、真面目で皆思いの子だったし、岡藤さんとも仲が良かった……けど……」

「けど……？」

「これ以上は分からないの、ごめんね」

俺も雰囲気だけで岡藤さんの言っただけじゃない過去があるんだと思っただ。

岡藤さんが変わったのはこの子も関係しているのではないかと薄々勘付いた。

何かは分からないがとても重い物語があるような気がした。

「あのーこの写真貰えませんか？」

「それは無理ね……あっ！けど、パソコンにもしかしたらデータが残ってたら大丈夫かも……」

今度、時間がある時に探すわ」

「ありがとうございます！」

そう言っただけで石崎さんと俺は約束をした。

何故、この写真が欲しくなったのかは俺には分からない。

ただ、本当に岡藤さんの笑顔が魅力的だった気がした。

そして、同じページに岡藤さんと岡藤さんのお気に入りの子と知らない先生の写真が写っていた。

「この先生、誰ですか？」

と俺は写真を指指して聞いた。

「あつ、この先生はその時いた先生よ…」

「そうなんですか…」

そういつて俺はフォトアルバムを閉じて、元の場所へ戻した。
そして、俺は再び仕事を再開した。

「あなたに逢えた それだけでよかった…」
メールの着信音が鳴った。

メールの主はただ一人…大好きなあの子だ。
直ちに携帯電話を開き、メールを見た。

『岡藤先生、久しぶりだね！元気にしてる？
私は元気に高校生活を送ってるよ
もうすぐ会う日ですね。』

何日がいいですか？

バイトが入ってる水、金、土以外なら良いよ！
じゃあ、なるべく早く返信してね』

あの子から久々にメールが来た。

メールが来るのは二ヶ月ぶりだった。

そう思いながらその子にメールを返信する。

「どんな服を着ようか…」

楽しい気分になりながら家に帰って行った。

3・理解 - Absurdity -

愛の光なき人生は無意味である。

by シラー

翌日、俺は大分早く朝学校に行った。

すると石崎さんと石崎さんと同じ理科担当の綾瀬さんがいた。

「おはようございます」

「おはよう、川居君」

「おはよう、川居」

そう言つて俺は自分の席に座り、コーヒーを入れに行った。

そして、再び戻ると綾瀬さんが俺の席付近で待っていた。

「大丈夫か？岡藤に殴られたんやて？」

「えー、まあ…処置が早かったので絆創膏だけで済みました…」

相変わらず石崎さんの話の広め具合は早かった。

そして、それを聞いてた他の先生にも広まっていた…

「川居、大丈夫か？」

「川居先生、痛くなかったですか？」

殴られた翌日は一気に職員室中に話が広まって心配された。

もちろん、翌日には腫れは大分引いて少し痛みが残っていたものの

ガーゼは心配される元なので絆創膏を貼った。

そして、ガラララっ…とドアが開いた。

「おはようございます」

と冷めた低めの声が聞こえた。声の主は一発で分かった。岡藤さんだ。

当の本人が来た瞬間、職員室は一瞬にして静まり仕事に戻った。

そして、岡藤さんの鋭い眼光が俺を見ていた。

当然、昨日のせいか機嫌が悪くコンビニで買ったジュースを飲んで

いた。

それから数週間が過ぎた。

岡藤さんとの関係は未だ複雑で話しづらかった。

修学旅行の下見や球技大会など3年生にもいろいろと行事があるので会議をする度に重たい空気が流れてしまった。

特に修学旅行の下見の際に俺とノゾと岡藤さんで同部屋になり、とても気まずかった。

ただ、何故か岡藤さんの鋭い眼光もよく見るが、時に悲しい眼を見せた。

何故かは分からないがとても悲しく、誰かを常に考えているような眼をしていた。

その理由も、あの時殴った理由も聞けずには過ぎて行った……

俺は喫煙者なので外に行き、喫煙室と呼ばれる部屋に行った。

部屋と呼んでる割に部屋ではなく椅子と灰皿入れのロッカーとテールブルがあつた。

そして、いつもの椅子に腰掛けて煙草に火をつけた。

その黄昏時間中に非常階段のほうから足音がした。

するとある生徒が俺のことを見ているようだ。

パツと後ろを見るとその生徒は奥田だった。

「先生、喫煙者なんだー」

「うん、そうだよ、黄昏中なんだよ」

煙草を吸いながら笑顔で言った。

眼鏡を掛けた奥田はフルートと譜面台を持っていた。

「奥田、目が悪いのか？」

「伊達だよ、お洒落、お洒落」

「眼鏡似合ってるよ、奥田」

「ありがとう、んじゃ今から練習頑張りまーす！」

そう言つて、奥田は譜面台とフルートを持って練習場所に行った。

そして、吹奏楽部のウォーミングアップの曲「ふるさと」を吹いていた。

「相変わらず奥田には優しいようで」

皮肉たつぷりに言ったのは岡藤さんだった。

岡藤さんは灰皿を取り出し、内ポケットから煙草を出した。

だが、煙草が見事に切れていたのだった。

「川居、煙草一本くれ」

「はい」

そう言っただけで俺は愛想悪く煙草を渡した。

「ありがとう」と岡藤さんは小声で言い、煙草に火をつけた。

俺はこの気まずい空間早く脱出したかった。そして、立ち去ろうとした瞬間……

「もうちょつと此処にいろ、川居」

「何ですか？」

「お前に言いたいことがあるんだ」

と真っ直ぐした眼で岡藤さんは言うもんだから俺はさっき座っていた椅子に再び座った。

「……お前は、生徒に恋をして幸せか？」

俺は驚いた。

岡藤さんがそんなことを聞くななんて思ってたなかった。

「ええ、恋してたらそれなりに楽しいので、それが？」

「……お前らしいな」

岡藤さんは「フツ」と笑い、煙草の火を灰皿で無理矢理消した。

俺はそれを見て怒りを感じた。

「……もう良いですか？」

「お前の気持ち、俺は分かるよ」

「えっ」

貶したいのか、理解してるのか、俺をどうしたいのか。

この人は本当によく分からない人だった。

「生徒への愛ほど、非条理なものはないと思うがな……俺は」

不気味な笑みと一言を残し、岡藤さんは職員室に戻って行った…

俺にもその恋の楽しみは分かる。川居の気持ちが俺には理解できた。けど、生徒への恋は予測以上に複雑で苦しいものなんだよ。

……俺だってお前と一緒に生徒に恋をしていたのだから。

4・意味 - Straight eyes -

恋の悲しみを知らぬものに恋の味は話せない。

by 伊藤左千夫

たった三年前と、もう三年前。

どれが俺には適切なんだろうか。

君はどう答えるのだろうか…

「卒業してもう三年か…」

って言うと言はなんて言うだろうか。

「たった三年でしょ！」

と笑いながら君は言うだろう。

俺はそれでもまだ君を想うのだろう…

あれから俺は岡藤さんの言葉が脳内から離れなかった。

『お前の気持ち、俺は分かるよ』

だから、俺は決めたのだ。その意味を聞くことに。

5時30分、岡藤さんが喫煙室に行くのを見計らって俺もちよつと後に行ってみた。

行くと案の定、煙草を銜えて携帯電話をいじりながら鋭い眼で俺を見てきた。

「……なんだよ、川居」

「岡藤さん、聞きたいことがあるんです！」

「それはなんなんだよ」

威圧感がある口調で言われた。

「そっその… あっあの… オーマイガー」

「意味分らないよ」

怒り口調になつてきたのだった。

まずいつて思いながらも聞いてみるんだ、俺。

「『お前の気持ち、俺は分かるよ』ってどどういう意味なんですか？」

聞いたぞ、俺。あの岡藤さんに聞いた。

すると岡藤さんは煙草の火を消した。

「そのまんまの意味だ」

「何故、分かるんですか？」

と聞くと岡藤さんは辛そうな顔をした。

だけど、そんな顔で重い口を開いたのだった。

「……………生徒が好きだったから」

俺は持っていた煙草を落としてしまったのだ。

衝撃だった。あの岡藤さんが生徒が好きなことに。

「えっ… 岡藤さんが……………」

「そうだよ、俺はずっと卒業しても愛してるんだよ、生徒が」

しかも、卒業した生徒が好きなんだ。

俺は全く岡藤さんのそんな恋の話なんて一切聞いたことがなかった。

「その子には告白しないのですか？」

「……………それは出来ないんだ」

『何故ですか？』って聞こうとしたけど止めた。

聞いちゃ駄目な気がして聞けなかったんだ。

「その話聞いちゃ駄目ですか？」

「長い話で良いならするよ… あれはな」

そう君も川居と同じでまっすぐとした眼で俺の話を聞いてくれたな。
覚えてるよ、君と出会ったのはもう六年前だ。
君こと桐野育きりのはぐみに出会ったのは。

5 . 会話 - I n t e r e s t - (前書き)

第2章 - 過去と、恋 -

5 .	会話	- I n t e r e s t -
6 .	愚痴	- O p p o r t u n i t y -
7 .	空虚	- P o w e r l e s s -
8 .	拒否	- W h y ? -
9 .	予感	- D e s i r e -
1 0 .	気持	- T e a r s -
1 1 .	痛感	- I t i s n o t m e -
1 2 .	意識	- T h e t o u c h -
1 3 .	努力	- I n t e r v a l -
1 4 .	存在	- S a c r i f i c e -
1 5 .	機嫌	- B e a u t i f u l -
1 6 .	秘密	- S u p p o r t -
.		
.		
.		
.		

5・ 会 話 - I n t e r e s t -

恋する男たちは泥棒と同様、はじめは用心するが、次第に用心を忘れ、恋にとりつかれてしまう。

b y デュクロ

あれは忘れはしないだろう。教師三年目の春…

俺がまだこんな性格じゃなくて、川居みたいな明るく希望を持っていた教師だった頃…

桐野育と出会ったのは六年前の入学式だった。

俺は一年五組の担任になった。

一年五組の生徒の一人だったのが桐野育だった。

その時の桐野育の印象は大人しそうで真面目そうな子だなんて思った。

黒髪のショートカットにななめ分けで眼鏡と真面目そうなもののオンパレードだった。

「桐野育」

「……………はい」

とごく普通の子って感じだった最初は。

入学式後、しっかり絞めたネクタイを緩めた。

他の先生たちがスーツからいつもの服装に変わっていた。

「どうでしたか？生徒たちは」

「そんなの分からねえよ、ただ初々しかった」

そう言っただけなのは新任で二十二歳の数学担当の多島剛たしまさこだった。

と言う多島も十分初々しかった。新任で緊張しているんだなんて思

った。

多島はクラス担任を持つてなく、副担任からのスタートだった。「けど、あの子たちもすぐにうるさくなるのかな」

と同じく新任の理科担当の湯浅も言った。ちなみに湯浅とは今の石崎である。

多島と同じく副担任からのスタートだった。

多島は俺より二歳下だったが、湯浅は俺と同じ二十四歳だった。

その為、湯浅は新任なのに多島とは二歳差だった。

俺には多島と湯浅は初めての部下だった。

同僚の綾瀬さんでも一つ年上だったし、俺の周りは年上で構成されていた。

別に上司の人々とは仲がよかったが何となく心細かった。

しかも、俺とはあまり年の差がなくて多島と湯浅は話も気も合った。それが当時の俺には嬉しくて仕方がなかった。

入学してしばらく経ったある日：

俺はまだ桐野とちゃんと喋ったことがなかった。

桐野は『育』と皆に呼ばれてなかった。

男子は当たり前だが女子も『桐野』って呼んでいた。

仲の良い女子で「はぐみちゃん」「はぐちゃん」だった。

しかも、桐野自身が自己紹介の時に「『桐野』って呼んでください」って言ったので余計その風潮が強くなった。

俺のクラスは四時間目は移動教室だったようだ。まだ教室の鍵は開いてなかった。

そして、もうすぐ昼食の時間：授業続きだった俺は腹が減っていた。立ちすくんでいる俺の目の前に窓から景色を眺めている桐野がいた。俺は一回話してみようと思い、声をかけた。

「…………育」

そう呼ぶと桐野は若干驚きながらゆっくりと後ろを振り向いた。

「何ですか？」

やはり警戒しながらちよつとキツめの表情で言った。
俺を何故か警戒しているようだ。

「腹、減ったな」

「そうですね」

そう言つてまた桐野は眺めていた。

そして、教室の鍵はやつと開き、教室に入った。

そうこれが桐野と俺の初の会話だった。

「なあなあ、岡藤先生！」

「うん、どうしたんや？」

「好きな芸能人のタイプは？」

いきなり生徒に聞かれてしまった。

こついうのが何気に悩んでしまうのだった。

「俺は竹ノ内結子やな、めっちゃタイプ、特にあの映画とかさ…」

と生徒を目の前にして何故か熱論していた。

それを見てある生徒が俺に言った。

「先生、引く！」

俺の目の前の女子と話していた桐野が言った。

とても毒っ気があつてきつく冷たい言い方だった。

「そうやって女優さんとかを熱く語るのが“引く”」

「グサツって来るね」

そう、桐野は意外に毒舌だった。

特に初対面、あまり喋ったことがない人ほどその風潮が強い

「年上ばかりじゃん、年上キラー！」

「けど、俺、付き合つたことあるのは同期ばっかやで」

「そんなん知らんし、年上キラー」

とこんな感じで結構馴れ馴れしくなった。

真面目そうな子から毒舌な子の印象に一気に変わった。

顔の割に結構言うこと一つ一つがきつかった。

それを聞いた俺の反応を見るのが大好きだったようだ。

だが、彼女にも意外な面があつて…

ある別の日の放課後…

桐野は別の友達二人と一緒にいた。

すると彼女は意外にもいじられキャラだった。

桐野は本当に俺の前では毒舌キャラでそんな一面があるなんて俺は全然知らなかった。

俺は桐野に結構興味を持っていた。

それが当時、どんな感情かは分からなかったけれども。

6・愚痴 - Opportunity -

人が天から心を授かっているのは、人を愛するためである。
byボワロー

月日が流れて…

文化祭が終わった。桐野がとにかくホリゾントを必死にしていた。
桐野は美術部だったからあんなのが得意だったのかもしれない。

中間テストも終わって、後は期末テストと冬になるのを待つだけだった。

別に俺と桐野は別に普通でちよくちよく喋る感じだった。

桐野は異常なほど数学と英語が下がっていた。

「おい、育！なんであんなに下がったんや？」

「それはまあ…うん…」

と言いたくなさそうだったのは確かだった。

深くは聞かなかったものの薄々気になってはいた。

「なあ、桐野！理科ってどこ？」

「確か第一理科室だよ」

桐野が何かに悩んでる様子は全くなくていつも通り平然に皆と接していた。

俺はまだ気づいてなかった。皆、気づいてやればよかったのにな。

「ねえ、先生！今日ね…何もないとこで滑ってこけたの」

「どんまいやな、育」

俺は桐野とあんなに接していたのに気づいてやれなかったもって大馬鹿者だと思う。

「さようなら」

終礼を終わらして職員室に向かおうとした時だった。

「先生……」

「うん、どうしたんや？」

「相談したいことがあるんです……」

俺は振り向いた。俺を呼んだのは飯塚さんって子だった。

飯塚さんは桐野と同じ美術部でとても絵が上手い女の子だった。

桐野も毒舌だったけど飯塚さんのほうが言うことがきつかった。

そして、桐野とも仲が良かった。

俺は飯塚さんを連れて相談室に行った。

「飯塚さん、どうしたん？」

「実は……はぐちゃんが……」

「桐野がどうしてん？」

「私の愚痴をネットに……」

飯塚さんはボロボロと泣き始めていた。

俺は衝撃的だった。あの桐野がネットに愚痴を書いていたのが……

ネットに書いていたのは飯塚さんのことを書いていた。

嫌だ、気持ち悪いなどそんなことを書いていたらしい。

桐野も相当不安だったんだろう。

俺はきついことを言ってるのを何度も見たことがあった。

友達だから冗談って分かってたのかもしれない。

だけど、桐野はそれにとっても傷ついていてネットに書いたんだね。

それを飯塚さんは見て、口で言う何倍もネット、文章は傷ついてしまふ。

飯塚さんは愚痴を書かれたこともショックだっただろうが桐野を傷

つけていたという事実にもっとショックを受けただろう。

「…………部活辞めたいよ……」

桐野もきつと辛かったのに桐野はあんなに平然だった。

美術部のことだから大人しい子が多くて誰にも理解してもらえない

とも思っただのか？

桐野も誰かに話せばよかったのに。俺でよければ聞いたのに。

「絶対辞めちゃ駄目、桐野にちゃんと聞くから……」

俺は何回も後悔した。

『桐野の話を聞いてやれば、様態に気づいてやればこんなことにならなかったのに』って素直に思った。

こんな時、俺は何も知らなかった。

飯塚さんの話ばっか聞いたからかな。

桐野も飯塚さん同様別の先生に話していたようだ。

「ねえ、多島先生…どうしたらいいの」

「……………」

そうこれがかっけで桐野は変わっていくことも知らず

俺はただ泣きじゃくる飯塚さんをただ見守っていた。

7・空虚 - Powerless -

愛は惜しみなく与う。

byトルストイ

それから、ある日職員室で仕事をしていたら…

「岡藤さん、俺、桐野の話を聞いたんです」

「そうなのか…」

桐野は多分飯塚さんが俺に相談すると分かっていたから多島を選んだ。

俺じゃ理解してくれないって思ったのだろうか。

飯塚さんは確か美術部の顧問、両親にまで言っていた。

だから、桐野も感じたのだろう。もう大人の味方は誰もいないと。そんな中で病んでいた桐野に声をかけたのは多島だった。

それで話を聞いてあげたってわけだろう。

「桐野も惨いが飯塚も結構惨い」

「なんでや？」

「飯塚に急に目の前で泣かれて『卑怯だ、気持ち悪い』とも言われたいよ、

飯塚の親にも担任の岡藤さんにも美術部の顧問にも言われちゃ居場所がないだろう、

とにかく、気持ち悪いと悪いことをしたって感情が混ざりすぎて全然集中出来ないらしいよ、テスト前なのによ」

本当にお互いしていることが惨かった。そりゃ辛かっただろう。

桐野も飯塚さんもお互い辛いのも分かるけれど俺は両方の味方も出来ない。

なんて、人って無力なんだろうか。

数日後、俺は相談室に桐野を呼び出した。

桐野は重たい顔をして明らかに疲れていた。

自分のした罪の重さ、誰も信じられない苦悩、守ってくれる人がいない不安……

桐野が今不安で俺に怒られることばっか考えているのだろう。

「育、飯塚さんからは話も聞いてるし自分自身も分かってるだろう？」

「うん……」

「飯塚さんも悪いって思ってるし、もちろん育も悪い」

「……………」

「だが、絶対にネットにそう言うの書いたらあかん！

不特定多数の人が見るものだから誰が見てもおかしくないねん！それは育分かるやろ？」

「……はい」

桐野はずっとただ下に俯いていた。

全く俺とは目を合わせてくれなかった。

桐野、やっぱり俺を信じられない？

飯塚さんの話を先に聞いた俺は信用できない？頼ることはできないのか。

「育、謝った？」

「……うん」

「絶対、部活辞めるなよ」

「はい……」

俺はそう言っつて、桐野との話を止めた。

桐野が俺を信頼してないことぐらい分かっていた。

だって、桐野は先生の中で多島を一番信頼していたのだから。

多島と俺との会話では桐野が出てこないことはなかった。

そして、多島は真剣に桐野と向き合っていて、それに答えようと必死だった。

職員室に戻り、椅子に座ると多島がいきなり俺に話しかけてきた。

「どうでしたか？」

「ただ俯いていた、俺は敵対してるって思ってるっぽい」

ほら、いきなり桐野の話。どれだけ心配してるんだろう。

他のことも心配したらいいのにつて俺は思っていた。

「飯塚さんに謝ったとか部活は続けるとか言ってた」

「桐野さ、多分謝ってないよ」

「えっ」

桐野は初めて俺に嘘をついた。

桐野は頑固者でまだ謝っていなかったのだ。

何故なんだろう。やっぱり俺を信頼していないからなのか。

「桐野、部活も辞めたいらしい」

桐野はもう一つ嘘をついたようだ。

部活も本当は辞めたかったのだ。

本当は桐野は逃げたかっただろう。

俺は何故か虚しかった。

俺の方が桐野を知っていると思っていた。

けど、本当はそうじゃなくて桐野の内面を知っていたのは多島だったから。

誰かに相談できているのならそれでいいじゃないかと俺は自分に言い聞かせた。

その虚しい感情が何かは今なら分かるけれど。

8・拒否 - Why? -

愛されることは幸福ではない。愛することこそ幸福だ。

by ヘルマン・ヘッセ

それから時は経ち、桐野と飯塚さんは相変わらず仲直りする兆しが見えなかった…

世間はバレンタインデーと言うチョコレート一色な日が近づいた。

誰か生徒一人でもいいから頂戴って思っていた。

先生方からは貰えるかもしれないけどな。

とにかく誰でもいいからチョコってのが欲しかったのだ。

正直顔は悪くないと俺の中では思っているのし、桐野でさえ言うてくれた。

「なあ、先生もな、チョコ欲しいん？」

「うん、そりゃな、一年三六五日ずっと受け付けてるよ」

ワックスがけをしながら桐野は俺に聞いた。

おっ、これは期待していいのかなってちょっと思った。

「学校にチョコ持ってきていいん？」

「家に一旦帰ったらね」

そう、俺は桐野に期待していたのだった。

だって、教師にそんなこと聞くんだぜ？

まあ、俺と桐野がそれなりに仲が良かったからだろうけど。

バレンタイン当日。

俺はいつも通り学校に行った。

もちろん待っている子がいるわけもなく、あくまでも普通どおりだった。

生徒たちもわくわくしているのが目に見えた。

チヨコ目的にいつも以上に髪型をセットしている男子が目立つ。

そして、女子も好きな人や友達に沢山渡っていたのだった。

ただ、何故か桐野だけは朝は普通だったものの昼食、終礼とずっと沈んでいた。

湯浅も『桐野さん、嫌なことがあったのかな？機嫌悪かったよ』と二時間目が終わった後の休み時間に職員室で言っていた。

湯浅も『あんな桐野さん珍しいよね』と言っていたのだった。

五時が過ぎて、教師だけの時間になった。

「岡藤さんー、チヨコですよ」

「ありがとう、湯浅」

湯浅は想像通りくれたのだった。もちろん買ってきたのだったが。

「岡藤、はい」

「岡藤君、どうぞ」

「ありがとうございます！」

と他の先生からも頂いたのだった。

すると横をふと見るといつもよりも一段と疲れている多島がいた。

「どうした、多島？体調でも悪いのか？」

「いいえ、違うんです……ちょっと話したいことが……」

「此処じゃ駄目なのか？」

「すぐ終わるんで……」

俺たちは非常階段に行った。

と言っても世間も二月だ。とっても寒かった。

だが、多島のすぐ終わるとの言葉を信じた。

「実はですね……………桐野にチヨコの代わりになるものを渡されたんです」

「ふーん、それでどうしたんだ？」

「教師としてきつくしなきゃって思ったんです、だから、拒否した

んです

『まあ、いいけど…』って言おうとした時にはもう遅くて桐野がめっちゃ怒ってて…」

「…！」

どうして拒否したんだよ。

いくら生徒でも駄目なものでもそれは受け取るんだよ。

俺が多島なら絶対に受け取るのに。

桐野を悲しませたくなくて絶対に受け取るのについて思っていた。

桐野、ごめん…気づいちゃったんだ、俺。

多島は鈍感だから絶対分らないだろうけどさ。

こんなに見え見えの行動なのに。

桐野は多島が好きなんだろう？

だから、俺には相談せず多島を頼っていたんだろう。

桐野はだからチョコの代わりの物をあげようとしたんだろう。

「俺、どうしたらいいんですか？何か俺も辛いんです…何もしてないのに、教師として正しいことのはずなのに」

「多島、謝れ」

「えっ…」

「お前が明らかに悪い、何も悪いことはしていないだろうが」
そう言うしかなかった。

だって、俺は桐野が渡したことは別に悪いことじゃない。

だから、多島は謝ればいいと俺は思ったのだ。

もう一つ、俺気づいちゃったんだ。

多島は秘密主義だから言ってくれないだろうけど。

お前も桐野が好きなんだろう？

だから、お前も拒否して辛いんだろう。それ以外に理由が見当たら

なかつたんだ。

けど、これで桐野も嫌いになるだろうなと俺は勝手に思っていた。

俺も何故か辛かつたんだ。

桐野が他の人を想っていたことに。

9・予感 - Desire -

愛せよ。人生においてよいものはそれのみである。

by ジョルジュ・サンド

桐野と出会って二回目の春が来た。

桐野は前髪も斜め分けだったのがパツンになっていた。

別に似合っていないことはなかった。

俺も多島も湯浅もとい石崎も残っていた。

石崎は大学時代から付き合っていた同期の奴と結婚したので石崎に変わった。

そして、副担任だった多島も石崎も担任に昇格していた。

桐野は俺のクラスの生徒でもなく、多島のクラスの生徒でもなく、

石崎のクラスの生徒になった。

石崎のクラスと多島のクラスは遠くて桐野はきっとショックを受けるだろうと思う。

だが、俺と石崎のクラスは隣同士で近かった。

それがどれだけの運命を変えるのかはこの時の俺には分からなかった。

二年生になって数日経った。

昼休み、桐野とその友達の堀里はあの時のように相変わらず窓からの景色を見ていた。

桐野はふと俺の方を見て目が合い、ニコツと笑っていた。

「眠たい」

「先生、久々やんね」

「ああ、久々やな」

これが桐野と俺の久しぶりの会話だった。

担任時代とは違ってやはり“距離”ってのがあったのだ。

その距離は遠いのか近いのかは分からない。

それから言うもの、桐野と俺はよく喋るようになったのだ。

中間テスト前日、俺は廊下で掃除をした。

桐野と桐野の友達の笹森が来た。

「やあ、先生！掃除してるの？」

「うん、そやで」

最初はそれだけだったのだが気づけば桐野も掃除に参加していた。

桐野はテスト前にも関わらず俺とどうでもいい話をしていた。

「なあなあ、先生のCD貸してな」

「テスト終わったらね」

「えー、なんで」

「だって、育、絶対聞くやん」

「やっぱケチやな」とぶつぶつ言いながら桐野は雑巾を絞っていた。

多分、生徒にCDを貸すなんて人生で初めてだった。しかも、俺の私物だよ、私物。

気づいてなかったけど気づかぬうちに桐野を特別視していたのかも
しれない。

「先生、今度さ、ポルノグラフィティのライブがあつてさ……」

桐野はアーティストのポルノグラフィティが大好きだった。

そして、あまり今時のアーティストは興味がなかったように思えた。
俺との話でポルノグラフィティは一週間に一回は必ず出てきたよう
な気がした。

「ねえ、たっじー！」

「何ですか？テスト前なんですから早く帰りなさい」

やっぱ多島のこと、気になるのか？

俺には分からなくて桐野と多島と喋ってるところを見ると明らかに
別世界だった。

俺しか知らない桐野、多島しか知らない桐野、友達しか知らない桐野、家族しか知らない桐野。

いろんな人に桐野は様々な表情を見せていて俺の前での桐野は笑ってるよ。楽しそうに。

けど、多島の前での桐野は俺の前と同じように笑ってるよ。しかも、楽しそうに。

だけど、一つ違うんだ。多島の前ではどれだけ嫌なことがあっても桐野は幸せそうに笑っていた。

その日の5時過ぎ、職員室に戻った。

すると多島はいつものように色んな教師たちと喋っていた。

そして、俺が帰ってきたことに気づき、俺の席のところに来た。

「岡藤さん、テスト前なのに『帰れ』って注意しないんだね」

「別に良いだろ、お前には関係ないだろう」

そう言う就多島は前髪を整えて、急にいつもと違う眼をしていた。俺は明らかに嫌な予感がした。

「それは、お気に入りだからですか？」

何故だろうか。急に震えがした。

多島に全てを悟られた感じがして怖かったのだ。

「別にお気に入りではない…ただ」

「ただ？」

「見守っていた生徒だ」

そう言う就多島は「ふーん」とどうでもいいいつもの顔に戻った。

そして、多島は黙々と仕事を再び始めていた。

確かに俺は桐野を見守っていた生徒だと思う。

ただずっと此処を卒業しても見守っていたって思っていた。

どうして、人は恋を覚えると“慾”を覚えるのでしょうか？

10・気持 - Tears -

恋愛は戦争のようなものである。はじめるのは簡単だがやめるのは困難である。

byメンケン

再び秋が巡ってきた。

桐野が飯塚さんと気まずくなつたあの秋である。

もうあれから二度目の秋が巡ってきたのかとしみじみ思っていた。桐野はあれから驚異的に変化して辛さをバネにして明るくなっていた。

あれが俺から見たらあれが桐野らしいなと思った。

そう言えば夏に言っていたよな…

「ねえ、先生…」

「何や？」

「本当はね……部活辞めたいの」

分かっていたつもりだったがやはりその言葉を聞くと辛かった。

桐野はやっぱそれなりに普通の一般人から見たら絵が上手かった。

だから、それを無駄にしてほしくなくて俺は…

「いつも笑顔で頑張っていたから、続けて？」

そんな言葉しかかけられないけれど桐野にはどう届く？

時は既に文化祭の時期になっていた。

俺のクラスは全然まとまりがないように思えた。

去年は桐野がいて必死にホリゾントを描いていたな。

今年の桐野は別に文化祭委員には入っていないようだ。

そして、アルトを担当しているようだった。

廊下でよく練習していたが明らかに雰囲気が悪いことが目に見えた。パーティーダーがきつそうな女子でそのリーダーと仲の良い女子と男子。

ちよつと派手な女子とその友達、頼りなさそうな男子のパーティーダー、そして、桐野。

桐野は意外にもどんな女子にでも普通に接せれるのだった。

それが桐野がどんなに辛い状況だったのかも分からなかったけれど。

四時十分、俺のクラスに音楽室の割り当てが当たっていた。他のもう一つのクラスが待っているのと同時に俺のクラスも待っていた。

やたらザワザワしているようにも見えた。

するとふと見ると誰か女子が泣いていたのだった。

それを石崎が説得？説教？よく分からなかったが怒っているわけではないようだ。

よく見ると桐野だ。あの絶対泣かなかった桐野が泣いていた。

何故泣いているのかは俺は全く知らなかった。もちろん周りの人間も全く知らない。

桐野が泣いているのを見たのは初めてだった。

飯塚さんとの出来事は絶対に泣こうとしなかった。桐野にとっては泣くことは負けらしい。

だから、桐野は絶対にどんなに辛いことがあっても泣かなかった。

その泣いている姿は美しいわけもないがやはり辛かった。

何があつたのかは全く知らなかったけれどただ辛かった。

桐野が泣いていたのを見たのは俺だけじゃない。もちろん、多島も見えていた。

そして、あの飯塚さんも。

「ふうー、今日も文化祭の練習終わった」

二時間ほど我慢していた煙草がやっと吸えたのだ。

俺には本当にこれが至福の時であった。そして、溜まっていたメールを見る。

うーん、どうしようかな。○×中学校から招待試合が来た。

やっぱり引き受けるしかないしな。普段お世話になっている先生だしな。

すると走っている足音が聞こえた。それは此処に向かっているような音だった。

その走っていた主は桐野だった――

俺に気づいた桐野はそこで止まっていた。

「先生、誰とメールしてるの？彼女？」

「他中の先生だよ」

と桐野は笑いながら言っていた。あんなにさっきまで泣いていたのに。

たった一時間の間にいつもの桐野に元通りだった。

ちなみに俺は彼女なんていなかった。彼女よりも仕事かバスケットばかりしていた。

桐野はしょっちゅう疑っていたが本当にいなかった。

生徒たちにはちよつと先生と仲良くしていたら「付き合ってるの？」って騒がれるんだよ。

「……………」

ちよつとした沈黙が起きてしまった。

桐野は話す話題が思いつかなかったようだ。

「ねえ、先生、泣いてたの見た？」

「うん、ちよつとだけならね」

と言い、俺は桐野の話を聞きたくて携帯電話を閉じた。

『見たのか』って感じの顔をしていたのだった。

「何で泣いてたん？」

「えー、うーん…まあ、簡単に言えば友達と言葉の衝突したの」意外とあっさりと言ってくれたのだった。

あの桐野が言葉の衝突とはね。人も変わっちゃうんだな。

「久々にあんなに泣いたわ、あの出来事じゃ泣かなかったのにね」
俺はその言葉を聞きながら俺は灰皿に吸い殻を落としていた。
そうだよ。本当によくあの出来事でも泣かなかったと思うよ。
辛かっただろうけどよく頑張っていたようにも見えた。

「お前は強いからな」

そう言っていると桐野は笑っていた。

小声で『ありがとう』と照れながら言っていた。

文化祭当日。

桐野のクラスは見事に成功していた。

どんなクラスよりも輝いていた気がした。

桐野がとても頑張っていたのを俺はずっと見ていた。

初めてだった。こんなにも生徒を応援したいと思えたのは。

初めてだった。こんなにも生徒を見守りたいと思えたのは。

初めてだった。こんなにも生徒に気持ちを抱いたのは。

初めてだった。こんなにも生徒に笑顔を貰えたのは。

桐野が俺の中でどんどん大きな存在になっていた。

それは何故か知らず、俺は荷物を運ぶ桐野に「頑張ってたな」と言
った。

そう言っていると桐野はただ微笑んでいたのだった。

11・痛感 - It is not me -

恋愛に年齢というものはない。それはいつでも生まれる。
byパスカル

文化祭も終わり、中間テストも終わり、少し肌寒くなってきた頃だ。学校では職場体験学習をしていた。

職場体験学習とは二日間実際に生徒たちがその職場で働くのだ。

その職場は多岐に渡り、もちろん近所のスーパーや百貨店や料理店、保育所、老人ホーム、さらには地域のラジオ局のDJや消防署など沢山あったのだ。

俺たち教師は生徒の職場を時々見学しに行くだけである。

ある意味、教師たちには楽な行事であったが俺は生徒会の担当であったから忙しかった。

俺は生徒会の担当の教師になっていた。

そして、桐野も生徒会に入ろうとしていたようだ。

桐野は保健委員長をしたかったようだ。が別に保健委員長をしたい男子 立花がいた。

俺は立花よりも桐野になつてほしいと思っていた。

さすがに立花にはその本心は言わなかったが保健委員会の話を一応した。

もちろん桐野にも言うのだが生徒会に入る予定の生徒が集まってる中、桐野は友達と喋っていた。

そして、友達が俺に気づいたのか桐野を呼んでくれた。

俺は桐野を連れて非常階段に行った。俺と桐野は隣同士で冷たい階段に座った。

「育、知ってると思うが立花も保健委員長したいのだ、もちろん育

が保健委員をしてたのも知っている、だけど、委員長の枠は一つしかないから美化委員長の枠なら空いてるけど……」

「けど、美化委員したことないし……」

立花はまさにクラスのムードメーカーな男子だった。

だから、どちらかと言うと大人しい方の桐野はほぼ諦めていた。

桐野はしたことはないがしてみようかなと思っていたようだ。

すると突然、颯爽と石崎が現れた。

「立花君、美化委員長するって」

「えっ……」

石崎の突然の報告に桐野はただ呆然としていた。

そして、俺は桐野に「良かったな」と囁いた。

放課後、俺は喫煙室に一人虚しくいた。

珍しく誰一人先生がいなくてただ一人で座っていた。

もうすぐ職場体験の事前訪問である。

桐野は老人ホームに行くようだ。そして、班長らしいのだ。

だが、石崎が言うには班の雰囲気あまり良くないらしく疲れているのが目に見えるらしい。

またあまり気の合わない子と班を組んだようだっつた。

すると足音が聞こえてその足音はどんどん近付いてきていた。

「……先生？」

「うん？」

その足音の正体は桐野であった。

すると桐野は地べたに座り込んでいた。

「先生さ、生徒会って何するのさ」

「学校を動かしていくんだよ、育はロボットでいうと腕だよ」

「例えばダサイよ、先生」

桐野はそうツツコミを入れていた。

桐野はいつものように馬鹿みたいに笑っていた。
それを見てたら俺も自然と微笑ましくなった。

だけど、話題がなくなってしまった。その時、桐野がふと言った。

「私もさ、悩んでいることがあるんだよね」

「ふーん」

ねえ桐野、俺さ。お前が思っているより優しくないんだよ。

俺って凄くない奴だから嫌なこと思いついちゃったんだよね。

俺のことどう思ってるのか知らないんだけど聞いちゃダメかな？

「それってさ、」

「うん」

やっぱ人ってずるいんだね。俺、今気づいたんだ。

「……それってさ、恋の悩み???」

確信を突く目で俺は桐野に聞いた。桐野とは全くそんな話をしたことがなかった。

案の定、桐野がとても慌てていて顔を真っ赤にしていた。要するに好きな人がいるようだ。

「誰なんだ？年上の男の意見を言っただけだよ」

「……まっ、間違っても先生には言わんよ!!!」

とても照れながら桐野は言っていた。こんな桐野を見たのは初めてである。

明らかに焦っていても赤面していてもどうしようもないくらいだった。

「あっ、けど……」

「けど？」

「一応言っとくけど、岡藤先生じゃないよ」

何故だろうか。久々にグサツて来た。

本当に桐野は俺が好きじゃないんだ。

いくら仲良くしても桐野から見たら仲の良い“先生”なんだ…

それ以上もそれ以下もなくてあくまでも先生なんだ。

「…そつ、そりゃそうやな、先生モテモテやしな」

この俺は笑っている？絶対無茶してるよ、俺。

桐野はそれを聞いて、ただ笑っていた。

俺はただ胸が痛かった。

桐野が別の人を想っていたことも、俺を先生としてしか見ていなかったこと。

そして、桐野という生徒に恋していたことも俺はこの時気づいてしまった。

12・意識 - The touch -

人は恋愛をすることによって恋愛するようになる。

byパスカル

翌日。

桐野は明らかに俺を避けていた。

いつもは俺に声をかけるが今日は友達と笑って平然に話していた。時々目が合うものの桐野の方から逸らされていた。

やはり昨日、あんなことを聞いたからだろうか。

四時三十分頃。

俺は顧問である男子バスケット部の練習をバスケットコートで見ている。

この部活の顧問であると本当にバスケットボールをしていてよかったなと思う。

「岡藤先生、岡藤先生、今すぐ職員室にお戻りください」と放送で呼ばれてしまった。

俺は急いで職員室に向かおうとしていた。その時…

「なあ、この写真の子さ……」

桐野が友達と先輩の先生と話していた。

なんでも掲示されている生徒の写真を見ているようだ。

そして、桐野が横をふと見ると俺のことに気づいたようだ。

俺を見ると凄くびくびくとしていた。

「なんやねん、その態度」

「えっ…だつて…」

「なんでなん？」

「昨日のことやしな、ありえへん」

やはりだ。昨日のことである。

それを桐野はとても気にしているようだ。

「昨日のことって何や？分からへんわ」

「最低、先生なんか大嫌いじゃ！」

「シヨックやねんけど…育に嫌われたって枕を涙で濡らすわ」

「そんなん知らんし」

相変わらずのノリの桐野。分かつてるのに誤魔化そうとする俺。

俺って桐野から見たらどんな先生なんだろうか。

それって本心なのか？大嫌いって言うのは。

そして、桐野と俺は何故か二人になっていた。

「本当は分かかってるんでしょ」

「何のこと？言ってくれたら分かるよ」

分かかってるのに焦らす俺、言いづらそうにする桐野。

本当に嫌な教師だと俺自身も思う。

「……悩み、もうこれで分かるでしょ」

「恋の悩み、だね？」

俺が小さな声で囁くと桐野はまた顔を真っ赤にしていた。

桐野はずるいと思いつながら黙っていた。

「いつでも待つてるから、恋の悩み相談」

「…………馬鹿じゃないの！」

と言って桐野は校門から出ていった。

その姿を俺は後ろから眺めていた。

髪、綺麗だな。ちよつとくせ毛だけど茶色の毛が一つもなくて黒い髪色。

あの髪に触れてみたいな…って変態かよ、俺は。

「相手は生徒だぞ…」

俺は自分自身の顔を覆うように手で顔を隠した。

だが、また再び桐野が悲しい思いをすることを俺は知らない。

事前訪問当日。

沢山の職場が一斉に行っていた。

もちろん俺たち教師は連絡が来ることを待っていた。

桐野は徒歩でも自転車でも結構遠い職場だった。

けど、何故だろうか。このモヤモヤ感は。

そう言えばあの時の悩みって何だったのだろうか。

今思えば恋の悩みなんかじゃなかったのではないだろうか。

気づけば少しずつながらもいろんな班が帰ってきていた。

俺も帰ってきたのを見計らって教室に戻り、職場体験ノートを回収し、手短に終礼を終わらした。

いつも通りに職員室に戻って男子バスケット部の部長にメニューを言い、俺はいつもの席に座った。

すると石崎が血相を変えて慌てて職員室に戻ってきた。

「絶対何かあった!」

「石崎、どうしたんだ?」

「桐野さんが事前訪問で何かがあった!放送で呼び出すわ」

本当かよ。女の勘なんてるくなことない。

桐野に限ってもうそんなことないだろう…

そんなことを思っている間に石崎が放送で呼び出していた。

放送で呼び出して一分も経たないうちに桐野が現れた。

その姿は眼を真っ赤にして片手に強く握ったハンカチを添えていた。

いつものような桐野じゃなくてまた桐野が悲しんでいたのだ。

そして、石崎は桐野を連れて相談室に入って行った。

職員室の先生と話していて笑っていた多島は涙を流す桐野を見た瞬間だった。

急にふと黙って石崎が連れていくまで話を中断してずっと見ていた。

「また何かあったんでしうか」

「俺にも分からない、機会があれば聞いてやるよ」

「……」

一年前、桐野の聞き役は多島だった。

だが、色んなことが関連してその役は俺になった。

立場が知らぬ間に逆転していたのだ。

それは明らかに多島は嫌がっていたようにも見えた。
多島の心の声は「俺の役目を奪わないでください」って言っていたに違いない。

喫煙室、今日は上司の先生が二人もいる。

一人の先生 植山さんは携帯電話で誰かと電話していたようだ。
もう一人 堂本さんはコーヒーを飲みながら煙草を吸っていたようだ。

俺はそんな中、上司の先生と話すわけでもなく黙って吸っていた。
するとあの足音が聞こえたのだ。

ついさっきまで泣いていた桐野がそこにいた。

「また泣いちゃったよ…」

「今度はどうしたんや？」

「簡単に言えば事前訪問でごちゃごちゃあつてん」

今度は事前訪問でまた何かあつたのか。

そこまで深く聞くわけにもいかなくて俺は桐野の話聞く。

「本当、自分が嫌いなんだよね…全然いいところがないし、可愛くないし…」

「俺は思っただけどさ、笑顔可愛いと思うよ。」

「お世辞は止めてくださいよ、先生」

「俺、お世辞言わないから。全部本気だから」

上司の先生いるのに何言ってるんだろうか。

口説いてるわけでもないのにそれが全て本心だった。

いつもただ桐野が笑っているだけで俺は微笑ましくなって幸せだった。

大好きな人の笑顔、それだけで俺は頑張れたんだ。

「俺も昔そうだった、今はこんなのだけど昔は自分が嫌いだった、
当時付き合ってた彼女とあんま上手くいってなくてさ…」

「うん」

「それをさ友達に相談したらさ、『それはお前が自分が好きじゃな

いからだろ？』って言われちゃって…」

過去の恋の話、正直そんなことを知って桐野は何とも思わないだろう。

桐野がそうやって真っ直ぐな瞳で俺の話を聞いてくれるのが好きだった。

どうでもいい話でもそうやってその瞳で見えていてふと目が合う時もうっぴきは真っ直ぐな瞳をしていた。

「そうか……そうじゃないとね」

いつものその笑顔、この笑顔を見たくていつも話を聞いてしまう。

他愛もない会話も真剣な悩みでも最後には必ず桐野は笑ってくれた。それとある上司の先生 国枝さんが廊下にいたのだ。

「岡藤先生に励ましてもらったか？」

「うん」

知らない間にまたこの上司の先生と仲良くなっていた。

桐野は気づけばいろんな先生と仲良くしていて守備範囲が広い奴だった。

「岡藤先生に肩組んでもらえ」

「それは遠慮します」

普段の桐野ならしそって思っただのだ。

ふと桐野を見るとその視線の先には多島がいた。

多島はこっちを見まいと必死そうだった。

「どの先生なら良いんだ？」

「秘密！」

人差し指を口元において言った。

だが、やはりその視線の先には多島がいて……

やっぱ桐野にとって俺はいい先生以上の感情がないのだ。

それは嬉しいこともある。だが、辛い。

「岡藤」

「何ですか？堂本さん」

「………笑顔可愛いのはちょっと嘘っぽく聞こえるぞ」

「…なあっ！」

と耳元でこっそり言っていた。
堂本さんはあまり普段俺に話しかけないのだが珍しく俺に話しかけた。

それがよりによってこんな内容なんて恥ずかしすぎる…

職場体験当日。

俺は職場を見に行くのに桐野の老人ホームを選んだ。

俺はこっそりずっと桐野を見ていた。

辛いことがあったのも感じさせない笑顔を利用者さんたちに振りまいていた。

「……………」

「こんにちは」

「なっなんで!？」

驚きまくりで焦っている桐野。

レクレエーションの時の桐野、ずっと見ていたぞ。

すると突然、利用者さんが俺に言った。

「前、お会いしましたよね？」

「えっ！」

滅多に驚かない俺が驚いていた。もちろん桐野も驚いていた。

もちろん、俺の記憶上面識はないのだが。

「手を繋げばね、こうするとね平和になるんよ」

と利用者さんは俺と桐野の手を握らせた。

俺は桐野の手に触れた。桐野の手に触れたのは実は二回目だった。

一回目は体育祭の時に競技のためであったが今回は何故だろうか。

あの時と違って手を触れると桐野はびくつてなっていた。

そして、お互い意識して触れているせいか意外と小さくて柔らかく

て女の子の手だった。

「あーもう、先生のせいで分からなくなっただじゃん」

と桐野に怒られてしまった。

そして、桐野がレクの司会に変わったのを見て俺は出て行った。

車に乗って学校に戻ろうとした時、俺はラジオのFMをかけた。

「ポルノグラフィティで『Love, too Death, too』」

桐野の好きなポルノグラフィティだ。

人は意識するとその人に関連するものでさえ反応してしまうのだから。

そして、その人の好きなものまで詳しく知りたいって思えるのだろうか。

13・努力 - Interval -

頼むから黙って、ただ愛させてくれ。

by ジョン・ダン

季節は冬に本格的に到来した。

一二月、期末テストも終わり2日が経ち、成績をつける時期になってきた。

もうすぐ冬休みである。そして、クリスマスに正月に…といろんな行事が満載である。

放課後。

「ふうー……」

溜息も出るだろう。クラスはあまり盛り上がってないしずっと大人しくて、ある女子は俺に反抗する。ある男子は部活にこないし…桐野のこともいっぱいあるしな……

俺は知っていたのだ。

桐野があまり部活に行っていないことと桐野が苦しんでいることは確かだった。

「寺川先生！英語の問題集を持ってきました」

桐野が英語の寺川先生を呼んでいた。

持ってくるのを忘れた本日提出締切の英語の問題集を持って来たらしい。

桐野は提出締切ギリギリの問題集を受け取ってもらってホッとしていた。

そして、俺はてっきり桐野が帰ったと思っていた。

それから五分後ぐらいに煙草を吸いに喫煙室に行こうと思ったが…

「岡藤先生！あのさー」

他の三年生の生徒に呼び止められた。

しかも、大して用もあるわけでもないのにだ。

すると保健室から桐野が出てきたのを俺は見てしまった。

そして、三年生が話を終わったので俺は喫煙室に行った。

そこには俺が来ると分かっていたのだろうか、桐野が待っていたのだ。

俺が喫煙室の椅子に座ると桐野がいきなり話しかけた。

「ねえねえ、岡藤先生、英語の問題集忘れたんだよ、馬鹿じゃない、私？」

「うん、ちょっと馬鹿だがよくあることだと思うよ」

確かに桐野は少なからず行動が馬鹿であった。

一年の時に理科でワインを使った実験をしたさいに日誌に「ワインって醤油臭いつて知った」って書いていて、俺もついそれには「それはない」とつつこんだのを覚えてる。

「先生、今回の英語の点聞いて！」

「何点なん？」

「八十七点！一年の時の成績を知ってる先生は驚いたでしょう？」

「えっ！嘘やる！？凄いな、育」

「けど、三点下がったんだ……」

「三点つて九十点！？嘘だろ……」

桐野は驚くぐらい英語が伸びていたのだった。

二期の中間に四〇点代というある意味一年生なのに点低すぎて悲しかった。

だが、たった一年で八〇点、九〇点代を取れるようになったのも極めて珍しい例だろう。

英語の寺川先生のおかげだろうが凄いと思うよ。

寺川先生も凄いけれどそれに答えようと必死に努力した桐野も凄いと思った。

何故、こんなに伸びたかと言うとある男子がテスト前に入るプリントを覚えたところ高得点を取れたらしくてその方法を信じたら本当

に点が伸びたらしい。

桐野は完全な文系な子だったから暗記は得意らしくてプリントを五回もやれば覚えられたらしい。

ある意味、恐ろしくて、けれど、本当に努力家なんだと思った。

「俺さ、英語だけは苦手やってんな」

「えー、本当に？」

「うん、まずプリントをファイルに閉じてなかったし、それで見返されなくてさ」

「先生、アホやろ」

と相変わらず俺のこんな馬鹿な話でも桐野が笑っていた。

桐野も行動は馬鹿だったがり数系の教科以外なら大体出来ていたらしい。

特に何故だか不明だが社会科は得意らしく九〇点代も度々取っていたらしい。

「それで高校の推薦があつて、それにたまたま英語があつてさ、それでこれはちよつと…な雰囲気になって…あの時はシヨックやったからそれから勉強したし！」

「けど、アホすぎるやろ」

「今の俺でも思つわ、アホやと思う」

ずっとこうして笑っていてほしいと思っていた。

俺の話で馬鹿みたいに素直に笑っていて？

他の人なんて見ないで。俺だけを見てほしい。

「ねえ、先生…」

「何や？育」

「先生つてね、いるんですか？」

俺の腕を掴み、桐野は上目づかいで言った。

桐野の会話は聞きにくいことには必ずといっていいだろう、主語がなかったのだ。

桐野は普段は普通に振る舞っているものの実は照れ屋だった。

「……その、この間自分に聞いたような感じのこと」

要するに好きな人であろっ。

意外と桐野はじれったい奴で結構じらしをする女だった。

「それはな……いない」

嘘だ。本当は目の前にいる桐野が好きだ。

けど、嘘つかないと俺自身も桐野も傷ついてしまつかもしれない。

「えー、嘘だ！絶対いるわ」

「残念ですがいません」

そう言っ俺は職員室に入っていった。

やばい、バれるかもと本当に焦っっていた。

席に座ってさっきのことを思い出して、つい髪の毛をくしゃくしゃしていた。

「あー、もう…やばい」

そう思いながら俺は職員室から出て男子バスケット部の部活を見に行った。

あっ、桐野の絵だ。

廊下に飾っであっった佳作の絵を俺は見た。

やっぱ本当は絵を見せないけど上手いんだよね…

人はどうして恋をすると好きな人の幸せで嬉しくなれるのでしょうか？

14・存在 - Sacrifice -

ある一人の人間のそばにいと、他の人間の存在など全く問題でなくなることもある。それが恋というものである。

by ツルゲーネフ

「今日は突然ですが石崎先生は忌引の為、二日間お休みだそうです」

「ふーん、そうなんや、ちょっと寂しいな、多島」

「別にそこまでですけど」

と相変わらず冷たい多島はまた仕事を再開する。

多島って優しいけど無愛想だった。

だから、多島ってあんまり人気ないと思うんだよな。

別に石崎の忌引がそこまで影響を与えることはないだろうと勝手に思っていた。

あの時までには、決して……

昼休み、いつものように桐野は友達の堀里と廊下に座っていた。

桐野の廊下に座っているところはもう当たり前のように桐野がいつも座っていた。

今日はいつもと違ってテンションが低くて何故か悲しんでるようにも思えた。

「ねえ、先生、悲しんでるの」

「何があつたんや？」

「それはね……」

珍しくいつもは言いたがらない桐野であつたが今日はすんなりと言った。

桐野は何かごちゃごちゃあつて（これは説明してくれなかった）落ち込んでいた。

そのまま、次の授業突入して教科は理科であった。

しかも、石崎は忌引の為、休んでいて他の先生が代理で授業をした。今回の授業の内容は唾液を使う実験であった。

その時に同じ班であるあの立花が空気を読まずにじゃんけんをしようとした結果、負けてしまったらしい。

そして、そんな状況の中、唾液が出る筈もなくて桐野だけではなく他の人も出なかったらしい。

それでその代理の先生が一人で実験したものの男子が騒ぎだした為、代理の先生の溜まっていた不満が爆発したらしい。

そんな状況の中、立花にもグチグチ言われてシヨックを受けていたのだ。

「もう嫌や、先生……」

「育、頑張れ」

「うー……」

桐野は俺の腕にしがみついて言った。

ちなみに此処は廊下である。いろんな生徒たちがどうしたんだろうつて目で見ていた。

桐野はたった一日で尋常じゃないくらい弱っていた。

とにかく、シヨックを受けていて明らかに泣いたんだなって思う跡もあった。

「こんなんでおつても楽しくない、後もう一日先生おらんからこんな思いまだせなあかんの……」

俺って何も出来てないじゃん。

桐野を励まして笑わすことしか出来なくて結局物事も解決してない。やっぱり俺って教師として無力だよな。

「育、頑張れ、いくらでも話は聞いてやるから」

俺にはこんなことしか出来ない駄目教師だと思う。

本当に桐野さえ助けることも出来ない駄目教師だ。

二日後、何もなかったかのように石崎は帰ってきた。

もちろん忌引で忙しかったので桐野のことなんて全くもって知らない。

「なあ、石崎…」

「あつ、ちよつとすいません…昨日までの授業は…」

言おうとしたが石崎は昨日までの授業はどうだったかや会議のこと、生徒会などいっぱい気になることがあつたみたいで俺は言えなかった。

とにかく、石崎が辛い思いをしていることを言えない俺は馬鹿だ。本当に桐野の言うとおり、俺は馬鹿だと思う。

昼食の時、俺は桐野のクラスを通ると何か言い争っているように見えた。

すると桐野と立花が言い合っているように見えた。

盗み聞きをすると桐野が部活に行つてないことを指摘されて苛立っていた。

桐野は自分の問題に人が介入されることを人一倍嫌っていたのだ。

「そのこと言おうかな」岡藤先生に「

岡藤先生だつてそんなことぐらい知ってるわ！」

そうだよ。俺はもちろんのように知ってるよ。

立花は知らないだろうが一年生の時から桐野を知っているんだ。

どんな生徒よりもつい優しくしてしまう生徒なんだから知ってるよ。

先生はいつも笑ってくれるって桐野は言うだろう？

違う、それは桐野がいつも笑っているからなんだよ。

ごめん、桐野。本当に先生として無力だ。

担任だったら絶対守ってるやるのに本当に駄目な教師だ。

担任じゃないことを理由にするなんて本当に駄目だ。

すると桐野は教室から出てきて俺に気づいた。

だが、いつもと違って話しかけずに桐野はトイレに走っていった。

何故だろうか。明らかに避けているのだ。

俺はその理由も分からず、職員室に戻った。

五限、俺はたまたま授業がなくて別の仕事をしていた。

多島はクラスの学級通信を作っていたのだ。

石崎はインターネットで生徒たちのホームページを見ているようだ。そう、教師たちの間で問題になっているのはインターネットのことだ。

一年生のときに桐野が問題になったように桐野のようなことは本当に序の口である。

普通に自分のホームページで生徒だけではなく、先生の愚痴も書かれる。

もちろん俺も「岡藤、うつとおしい」などと書かれたことももちろんあった。

桐野もホームページを持っているが一時閉鎖中らしくて見れないと石崎も言っていた。

「ねえ、岡藤さん、これ見て」

「うん、どうしたんだ？」

と石崎は俺を呼んで、パソコンを見せたのだ。

すると石崎のクラスの生徒のホームページであった。

「石崎、これがどうしたんだ？」

「この日の日記クリックして」

そして、石崎に言われるがままにクリックをした。

そのクリックした日が桐野が唾液を使った実験で悲しんだ日であった。

その生徒の日記にはこう書いてあった。

『今日のある授業のことで

誰かさんが岡藤に廊下で愚痴ってた』

別にその生徒は桐野や実験のことに全く介入してなかった。

なのに無関係な人がこうやってホームページに書いていたのだ。

多分、桐野はこのホームページを見たのだろう。だから、避けたのだろうか。

俺にもう迷惑をかけられないって思ったからなのか？

別に迷惑だなんて思っているわけではないのに。

むしろ、桐野の愚痴を聞いていると本当に信頼しているんだなって思った。

「ねえ、これって誰のことなの？」

「……………桐野」

石崎は桐野の話題を出すと少し悲しんだ。

石崎自身が頼られてないって分かっているからだ。

「この際だから言わしてもらいますけれど岡藤さんは甘すぎるんです、桐野に対して」

「石崎、お前に何が分かる？桐野の何が「いい加減にしてください」と今まで話に入ってなかった多島が入ってきたのだ。

そして、明らかに多島は怒っているように見えた。

「桐野の何がそんなに特別なんですか！桐野の何をそんなに知ってるんですか！桐野の何を」

『バシッ』

つい多島を殴ってしまった。川居を殴ったのと同じように。

多島を殴った。職員室中の冷たい視線が俺に一気に集中した。

「チヨコを断ったような奴に何が分かるんだ」

そう言い放つと多島は真っ青な顔をしていた。

俺は職員室から出て喫煙室に行った。

「こんなことしたいんじゃないのに、俺も」

何故、恋をすると自分を犠牲にすることも、他人を犠牲にすることも平気なんですか？

15・機嫌 - Beautiful -

ロマンチックな恋だけが恋ではありません。

本物の恋とは、オートミールをかき混ぜる行為のように平凡で当たり前なのです

by ロバート・ジョンソン

新学期、気づけば新年が明けていた。

今年は実家に帰って平凡に過ごしていた正月だった。

実家から帰ると数少ない年賀状が届いていた。

小学校、中学校、高校、大学時代の友達や教師などの年賀状は大体実家に届くのだ。

だから、俺の家に届くのは本当に生徒からぐらいである。

もちろん中には達筆な字で『岡藤 龍様』と書いていた子がいた。

字でなんとなく分かったが名前を見ると『桐野 育』とこれもまた達筆な字で書いていた。

裏を見ると絵がなくてギッシリと字で埋め尽くされていた。

『岡藤先生へ

去年はお世話になりました。岡藤先生にとってどのような年でしたか？

私は周りがとても変化して笑ったり怒ったり悲しんだり、時には泣いたりいろんな意味で成長した1年でした。

岡藤先生とはいっぱいあったよね。

CD貸してもらったこと、クラブを辞めたいって言ったこと、文化祭で励ましてもらったこと、喫煙室で聞いたこと、廊下で励ましてもらったことなど言い出したらきりがなくていっぱい喋ったと思います。

担任でもないのに関わっていたし、石崎先生より頼っていたかもね。先生はいつも正直迷惑だっただと思います。

先生にいつも無駄なことばかり喋っていたし、担任じゃないのに相談してたし…

内心はうつとおしい生徒だと思っていたんじゃないかな？

けれど、こんな馬鹿でうつとおしい生徒でも優しくしてくれてありがとう。

いつもどんなに忙しくても励ましてくれてありがとう。

そして、ろくでもない話でも泣いていた時でも笑わしてくれてありがとう。

来年は岡藤先生が担任だったらいいのになって思います。

桐野育より』

こんなにギツシリ書いて暇過ぎだろう。

俺は桐野に返事を書かないといけないのでハガキを用意して書いた。桐野がこんなにも必死に手書きで書いてくれたんだから俺も……そう思いながら俺は桐野への年賀状を書いていた。

始業式当日…

冷えた手を自分の吐息で温めていた。

職員室に着くといろんな先生たちがストーブに群がっていた。多島も石崎もいて俺はこの間のことが嘘のように接してみた。

「石崎、これをさ桐野に渡して」

「年賀状ですか、しかも、手書きじゃないですか！」

そう、桐野への新年のプレゼントは手書きで書くことだった。パソコンでも良いかと思ったのだが桐野も喜んでくれるだろうと思っただけだ。

「桐野、いっぱい書いてくれたからさ」

「私もなんですよ」

「俺もですよ」

どの先生にもそんなのなんだ。やっぱり暇すぎるだろう。

石崎への年賀状は手書きであつたが俺のに比べて字が少ないように思えた。

「まだ少ないな」

「俺も少ないと思いますよ」

「えー！多いじゃないですか」

そう言つて鞆の中から綺麗にファイリングした年賀状を見せた。

そして、多島も机の中に入れていた桐野の年賀状を取り出し、見せた。

「桐野さん凄いね……」

俺の年賀状も丁寧に色鉛筆で塗つていて字も桐野らしい字だった。

だが、多島への年賀状は俺と同じように色鉛筆で丁寧に塗つていたがいつも以上に綺麗な字で書いていた。とても文章も多くて驚いた。やっぱ桐野は――

隣のクラスが廊下に列を並んでいる時、桐野は後ろの友達と喋つていた。

その友達と何を喋っているのか聞こえた。それは俺からの年賀状が来ないだった。

書いたときはもう5日でこれはもう本人に渡した方が早いと勝手に判断した。

「先生、年賀状届いた？」

「うん」

「なんで、返さないの？」

「あれ、石崎先生に渡してるから」

「あつ、そうなん」

いつもどおりに笑つて桐野は自分の列に並んでいった。

そして、始業式も終わつて桐野は俺のクラスの教室に来た。

「先生、ありがとう」

「いえいえ」

そして、桐野は友達の方に行った。

桐野の後ろ姿をふと見て思う。綺麗になったなって。

一年前なんてもっとダサくて地味な子だったのに……

多分、これからもっと綺麗になるんだろって思うと楽しみだった。

これが教師としての楽しみなんだ。

生徒が成長していく過程を見るのがとても楽しみだった。

新学期に入り、授業も始まったようだ。

桐野のクラスは次の授業は数学らしい。

俺も体育教師としていろんなクラスの授業が始まった。

体育の授業は体育館も冷えきって寒いし、運動場でも風が当たって寒い。

どっちにしても寒いし、体力を使うのは変わりがなかった。

昼食後、俺はとても機嫌が悪かった。

昨日の試合でいつも戦って負けてばっかなのに勝てそうだったのだが、一瞬の隙を突かれ負けてしまったのだ。

それに授業ではあまり俺の言うことを聞いてくれないし……

窓からテニスコートを眺めると上靴でバレーボールしてる女子たちがいちいちいた。

「おい、お前ら！上靴を外靴に履き替えてバレーボールはバレーコートでやれ！」

「チエツ」

と舌打ちをして嫌な顔をしてテニスコートから出ていった。すると横には桐野と堀里がいた。桐野が俺のところに来た。

「先生、今日は良い日やねん！」

「ふーん、あつそう」

「……………」

ごめん、今日は機嫌がとっても悪いんです。

桐野が話しかけても今日はニコニコ話せない。

職員室に戻ると石崎と多島は何かを話していたようだ。

「どうしたんだ？」

「また桐野と立花がごちゃごちゃあつたんだってさ」

今回は数学の授業で証明を班で解かなきゃいけなかったらしい。

そして、立花と桐野は同じ班なのだ。

桐野は自信がなかったのだが解けたらしく、班の女子に見せてと言われたらしい。

だが、桐野は証明の答えに自信がないし、それで間違っていたら責められると思い、頑なに拒否をしていた。

そんな中で立花が「おい、見せろや」と入ってきて桐野もそんな口の叩き方じゃ教える気もない。

「桐野、意味分からんねん！さっさと教えろや」って何故か立花が逆ギレした。

それに桐野もムカついたのか「お前の方が意味分からんねん！」ともちろん怒った。

その現場をずっと見ていた多島も怒って「教えてもらう人に向かってその口の叩き方はないやろ！」と言ったらしい。

桐野の証明の答えも合っていたらしいのだが。

「ふーん、大変だな」

「立花の言い方が物凄く腹立つたのでつい怒っちゃいましたね」
そりゃ、桐野にとって心強かっただろうな。

立花はどの先生も怒られてなかったからな。

俺は二年男子体育担当なので立花によく怒っていたけれど。

多島は生徒にナメられているし、あまり身体も強そうではない。

生徒にとってはいじられキャラって感じだった。

だから、多島だったら怒らないだろうって勝手に推測して桐野に言っただろう。

だが、意外に多島は怒るときはとても怒る奴だった。

それで怒ってくれたから桐野は良い日って言っていたのか……

俺の眼に映る君はとても綺麗だ。

だけど、俺の眼に映る君が綺麗と
思っているなら他の人にも君は
綺麗に映る？

綺麗に映るならお願いします。

俺から君を奪わないで欲しい。

私がお前を愛することく、お前も私を愛するならば、我々の恋を切り裂くナイフがあるうか。

by キプリング

新年に入って一ヶ月が経とうとしていた。

まだまだ季節は冬で手が凍える寒さだった。

男子の体育が持久走なので毎回運動場である。

寒いし、寒さで体力は消耗する。走っても体力は消耗する。

俺はつくづく思った。おっさんになったなつて。

「岡藤せんせい！」

と誰か生徒が俺を呼んだ気がした。

横を振り向いても誰もいなくて上を見ると教室から桐野が呼んでいた。

そして、俺はニコツとしながら手を振ると桐野も笑いながら手を振りかえしてくれた。

すると桐野は教室に戻り、いつものように友達と話していた。

今日は五時間授業で終了だ。

通常は六時間授業なのだが今日は五時間授業だ。

五時間授業なのでいつもより余裕があるので教室を綺麗に一人で掃除していた。

「ねえ、先生！清見てない？」

「見てへんわ、ごめん」

清っていうのは俺のクラスの生徒で桐野と仲の良い子だ。

いきなりの桐野登場に俺は少し驚いていた。

「先生、掃除手伝ってあげるわ」

「ありがとう」

そういつて、桐野は黒板を消すのを手伝ってくれた。
いつも優しくてこうやって掃除も手伝ってくれる。

桐野、お前気づいてないだろうけど本当にいい子だよ。

「ねえ、先生…お願いがあるの…」

「何や？」

急に何を言い出すかと思えばお願いって…

桐野の願いなら俺は叶えてやりたいって思った。

だが、桐野はずっとモゾモゾしていて焦っているように思えた。

そして、廊下を見て人がいないかを確認して俺に言った。

「……バツ、バレンタインチョコをね……渡してほしいの」

「誰に？」

桐野はずっと綺麗な髪をくしゃくしゃしていた。

今、桐野はとても照れていた。照れてどうしようないぐらいに。

多分、渡してほしい人がどういう人なのか分かる。

きつと、“好きな人”だからバレたら恥ずかしいのだろう。

「うーん、先生の身近な人だよ…？」

「そんなんじゃないよ、いっぱいいるよ、身近な人なんて」

本当にそうである。身近な人なんていっぱいいた。

生徒かも何か俺には分からないだろう？

「え…もう嫌や、泣きそう」

「絶対泣くなよ、俺の立場ないからな」

桐野が泣きそうぐらい恥ずかしがっていた。

泣き顔はあまり見たくはないから。俺だって。

「じゃあ、一番のヒント出すね！」

「うん」

「……………数学の人、だよ？」

その一言を聞いた瞬間、やっぱりかっと思った。

桐野が好きだったのはやっぱり…

「……多島先生、だね？」

「うん……」

桐野がずっと好きだったのは“多島”だった。

薄々勘付いてはいたけれどいざ聞くと……胸が、痛い。

「何故渡してほしかったかって言うとなつじーにね、去年渡したら怒られたの」

「何渡したんや？」

「チヨコじゃないけどその代わりになる物……」

多島から聞いたことあるはずなのに桐野にも同じことを聞いた。

桐野がその話をするとても辛そうで悲しそうな眼をしていた。

「きつとき、多島先生も照れてたんだよ」

廊下からこの教室に向かって走ってくる足音が聞こえた。

こんな緊迫した場所にある女子がダッシュで走ってきた。

「ごめん、先生、忘れ物しちゃってさ」

「はい、どうぞ」

とその女子に忘れ物を手渡すとその女子はふと後ろを見た。
すると後ろを箒で床を掃いていた桐野と目が合ったようだ。

「桐野、なんで入ってるの!？」

「掃除手伝ってもらってたから」

「じゃあ、うちも手伝おうか？」

「いいよ、もう終わるから」

そう言うとその女子は出ていった。

桐野はまだ照れていて、顔が真っ赤だった。

そして、俺は箒を掃除道具入れに入れながら言った。

「育、渡すよ」

「えっ……」

俺は教室の後ろのドアを閉めたのだ。

そして、桐野はふと安心した顔を見せた。

こんなこと、本当は言いたくない。けど、言えばきつと……

「育、応援するよ」

「先生、ありがとう！」

すると桐野は俺を見て微笑んでいた。

そして、桐野は教室から出ていったようだ。

「……なんで、多島なんだよ！」

俺はその気持ちを心の奥でぶつけていた。

誰にも言えないこの気持ちをぶつける人なんて誰もいなかった。

生徒と、先生。

俺らの恋の辞書に“実る”って言葉はあるんだろうか？

そして、俺らの恋の辞書には“幸せ”ってどういう意味なんだろう

全てはこの恋の辞書の大半はきっと“慾”と“犠牲”で出来ている
のだろうけど。

17. 問題 - Taste of the love -

恋の悩みほど甘いものではなく、恋の嘆きほど楽しいものではなく、恋の苦しみほど嬉しいものではなく、恋に苦しむほど幸福なことはい。

by アルト

五時過ぎ、喫煙室に俺はいた。

桐野は多島が好きなこと、それと同時に俺が好きではないこと。俺が良い先生としか見れない事実。それ以上は見れないと知った。すると喫煙室に誰か教師が来たようだ。

「岡藤、なんでそんなテンション下がってるんや？」

「特には何もありません、別に大したことは…」

この人は竹中咲さん。たけなかさき俺の上司である。

見た目は男の人っぽくて背も低くてかっこよくて可愛い男性って感じだが名前の通り女性である。

そこらへんの男、例をあげると多島よりよっぽどかっこいい。

性格も男っぽくて、多分多島よりも男っぽいと俺は勝手に思う。

そして、俺の……元彼女だった人でもある。本当に俺はこの人の彼氏であった。

こんな竹中さんだったけど本当に可愛い人だった。

皆には男っぽく振る舞っていたけれど俺には本当に女性っていうよりも女の子であった。

なんて言うのかな。世間で言うツンデレであったと思う。

今考えれば何故別れたんだろうか。俺も覚えていないんだ。

そして、俺は喫煙室から出ようとしたときだった。竹中さんが腕にしがみついた。

「ねえ、岡藤、またやりなおせないかな？」

「……………えっ？」

「だから、また付き合えないかなって」

突然のことであつた。また付き合わないかつて…

俺には今一応好きな人が片思いながらいるわけで…

「竹中さん、少し考えさせてください」

「分かったよ、岡藤」

また問題が一つ増えてしまった……………

二月一四日。桐野との約束の日。

俺も正直な話、ソワソワしながら学校に来た。

別に理由なんてない。ただ、多島が受け取ってくれるかどうか気になった。

昼休みのときだった。桐野はいつものように堀里を待っているようだ。

そして、俺が出るのを今かと待っていたようだ。

「先生、いつ渡そうかな？」

「放課後に職員室来て」

「えー！ 恥ずかしいやん」

つてどれだけ桐野は恥ずかしがり屋なんだ。

確かに桐野って恋愛事に初々しい感じにも見えた。

知ってる人から見たら本当に分かりやすい行動だが知らない人から見たらごく普通に冷たく接していた。

「じゃあ、自分で渡す？」

「先生……………酷い……………」

頬を膨らまして桐野は言った。

周りから見たらごく普通の生徒と先生である。

だが、会話の内容は聞けば危険な内容だった。

最終的に生徒会の集まり終了後ってことになったのだ。

六時間目終了後、掃除に突入しようとしたときだった。

突然、音楽担当の下田さんが俺のクラスの教室に入ってきたのだ。
「おい！なんで逃げるんや！ちよつと来い」

そう言つてクラスの女子の五人組は下田さんに廊下に連れられた。
事情を聞けば授業中にカイロを投げて遊んでいたらしい。

本当に馬鹿かつて言いたい。中学二年生になつて何授業中に遊んでるんだ。

「お前ら、中学二年生だぞ！こんなことやつて恥ずかしくないんか！」

「自分らだけちゃうわ！」

「けど、お前らもやつてたんやろ？それには変わりないやろが」

とこんな怒りがずつと続き、終礼後も説教し続けた。

もちろんこんな説教して生徒会の集まりなんて行けなくて……

約束破つたのも分かつていた。だけど、クラスのこと大事だから優先したのだ。

四時三十分、職員室に戻つたのだ。

「とても怒つてましたよね、岡藤さん」

「しょうがないだろう、怒らなきゃいけないときぐらいあるし、ああ……」

と石崎も話しかけてきた。

まだ機嫌は微妙に直つていない。そう不機嫌なのだ。
人なんだ。感情の気丈だつてあるだろう。

そして、石崎と話していると職員室のドアが開いた。

とても真つ直ぐな瞳で俺を探していた。そして、俺を見つけた瞬間、

「岡藤先生！岡藤先生！」

「ちよつと待つて」

石崎との話を一旦断ち切つて俺は桐野のところに行った。

俺は職員室の目の前にある給湯室に入つていった。

ドアを閉めて二人きりの部屋になった。

桐野は多島に渡すのを探しているようだった。

「はい、これですよ」

そう言つて、桐野は可愛い紙袋を渡した。

すると中を見るとラッピングをした二つの袋が入っていた。

二つもあげるのか…良いな…多島…

「二つもあげるん？」

「片方は…先生のだよ？」

「えっ…」

まさかの俺の分も用意されてると思つてなかった。

俺は冷静を振る舞つていたつもりだったが内心ドキドキだった。

「言つておいてほしいことは？」

「義理つて言つて」

「分かつた、ちゃんとやつておくよ」

俺は着ていたパーカーを脱いでパーカーの中に紙袋を隠した。

パーカーを脱いだら俺は半袖のＴシャツだった。

そして、桐野は急いで給湯室から出て行つた。

俺はその脱いだパーカーを持って職員室に戻つた。

「何してるんですか！？寒くないんですか？」

「もう一枚パーカーあるんで」

多島は冷たい眼でとても寒いのに…つて思った。

そうして、俺はもう一枚のパーカーを着たのだ。

俺は平然に仕事をこなしていたのだ。

九時頃、職員室の教員数はほとんど少なくなっていた。

「じゃあ、お先に失礼します」

いつもは掛けてない眼鏡を掛けて、多島は出て行こうとしていた。

そして、トイレに行くふりをして俺も職員室から出て行つた。

「多島、ちよつと待て」

「何ですか？」

「はい、どうぞ」

そう言つて俺は桐野からの紙袋を渡した。

すると多島は靴を履きながら少しばかり驚いていた。

「…誰からですか？」

「桐野、義理だつてさ」

「えっ」

多島はそう言いながら桐野からの紙袋を受け取った。
すると多島はとても微笑んでいるようにも見えたのだ。

「正直な本音、桐野ってどう思うんだ？」

「……………守ってやりたい、これ以上は言えませんよ」

そう言つと多島はバイクに乗って学校から出て行つた。

俺は職員室に戻り、桐野からのバレンタインのを見た。

なんと手作りの美味しそうなクッキーだった。

俺は職員室で一枚だけ食べてみた。味はごく普通のクッキーだった。

だけど、とてもこのクッキーには何故だろうか。

「岡藤さん？」

気づけば一筋の涙が流れていたのだつた。

そのクッキーには……………恋の味がした。

18・欲求 - Loneliness -

恋愛には四つの種類がある。情熱の恋、趣味の恋、肉体の恋、虚栄の恋。

byスタンダール

休みを挟んで月曜日になった。

月曜日、桐野になんて言おうかって考えていた。

「クッキー美味かったよ」ぐらい言ったら桐野は喜んでくれるかな？
そう思いながら俺は学校に着いたのだ。

すると二年教職員連絡黒板を見ると本日の休みの生徒を見ると『桐野』と書かれていた。

「桐野、休みなのか？」

「うん、そうなのよ、風邪らしいわよ、ちょっと疲れてたのかもね」

「あー、うん」

桐野が風邪か…珍しいな。いつも元気で明るい桐野が風邪をひくなんて。

桐野、保健委員長のくせに自分が予防出来てないってどういうことだよ。

大丈夫かなって思いながら俺はいつものように仕事をしていた。

ただ何をしてもし少し気が散ってしまっしょうがなかった。

朝休みにたまに会う桐野の「おはようございます」って声も

授業後に教室から馬鹿みたいに笑う桐野の「岡藤先生！」って声も

昼食後にいつも俺に他愛もない話をする桐野も

終礼後に俺に話をしたくて待っている桐野も

喫煙室でたまに会って俺の小さな変化に気づく桐野も

下校時間にたまに会う桐野の「さようなら」って声も

俺は気づかないうちに求めていたようだった。

そして、その声や姿をいろんな生徒と重ねていた。

次の日、いつものようにジューズを買って学校に来た。
職員室に入ると桐野のクラスの鍵はまだあった。

いつも桐野が一番に学校に来て教室の鍵を開けるのだ。

そして、いつも以上に職員室のドアの開く音に敏感になった。

『ガラガラララ…』とドアが開いた。

見ると白いマフラーをしたちよつと顔色の悪い桐野がいた。

「おはよう、桐野さん、大丈夫？」

「ええ、医者にはインフルエンザと同じくらいの風邪って言われま
したけど」

インフルエンザと同じくらいの風邪ってどんなのだよ。

レベルは一緒だけど感染性はないってことなのか？っていう疑問が
あったものの、桐野は職員室から出ていった。

「桐野、インフルエンザと同じくらいの風邪ってどんなんですか」

と多島は笑いながら言っていた。

確かに昨日、多島はどことなく寂しげだった気がした。

気のせいかもしれない。ただ、多島は心のどこかで桐野で埋めてい
たと思う。

二時間目後の休み時間だった。俺は桐野のクラスの男子の体育だっ
た。

すると桐野は保健室に向かって歩いていった。やはり顔色が少し悪い。

「育、まだ顔色悪いな」

「うん、まあね…熱出てたしね…」

やっぱ風邪で大分寝込んでいたようだった。

「ねえ、先生」

「何や？」

「……何か言ってた？」

「『えっ』って言ってた」

「そっか…ありがとう」

そう言って桐野は保健室に向かって行った。

そして、俺も桐野のクラスの男子の授業の為、運動場に行った。

カレンダーを見るともうすぐ二年生も終わるのかと思いながら三月に突入した。

学期末テストで泣く者も笑う者もいて、実に両極端なテストだった。保健体育もテストがあつたし、出来る人は出来ていたように思えた。そして、今日はテストを返さなければならぬ日だった。

ちなみに桐野のクラスも男子だけが返す予定だ。

朝、職員室に行くと教職員の休み、出張などの黒板を見ると“多島 忌引”と書かれていた。

「多島、忌引かー」

「うん、親戚の方が亡くなったそうよ」

と石崎と朝から喋っていた。

そして、昼休みだった。いつものように桐野が待っていた。

それで桐野は俺のところにやって来た。

「テストどうやった？」

「テストは普通やな…それよりも寂しい……」

ああ、そうだった。桐野は多島が好きだったんだ……

だからか、そんなにテンションが下がっていたのは……

「今日は休みやからなー」

「どうして休んでるん？」

「親戚の方が亡くなりはったから、あんまり触れんといてあげて」

「うん、ありがとう」

そう言うと桐野は微笑んだ

やっぱ桐野は本気で多島が……好きなんだ。

「あつ、そうだ！岡藤先生！」

「うん、何や？」

「実はね、飯塚さんと和解したの！」

「えっ！良かったな」

へへッと桐野は照れ笑いをした。

一瞬、頭を撫でそうにもなった。だけど、それは理性が食い止めてくれた。

そして、桐野は教室に帰って行った。

俺、桐野に恋してどうするんだろうか。

だって、“叶わない恋”じゃないか…

「次の転勤先は……丸山です」

「今度は丸山中か、あの岡藤さんがいるところですね

次は……どんな学校なんでしょうね」

愛は、この世に存在する。きっと、ある。見つからぬのは愛の表現である。その作法である。

by 太宰治

気づけば四月だった、三度目の桜舞い降る季節がやってきた。

桐野の思惑通り、俺も多島も残っていた。

これで悲しむ顔を見ないで済むって思うと一安心した。

桐野の担任は俺じゃなかった。かと言って多島でもなかった。やっぱり石崎だった。

俺と多島と石崎で桐野の取り合いだったものの、じゃんけんで負けて勝ったのが石崎だった。

そして、四月一日のことだった。新任、転任の教員と初対面の日だった。

するとその先生たちが入ってきて、それと同時にその先生たちの名前が書いた紙が配布された。

その紙を見て驚いた。その人は見慣れないスーツを着ていた。

そして、一人ずつ紹介していたのだった。もちろんそのスーツの人も紹介した。

紹介や校長の話が終わると俺は真っ先にその人のところに行った。

「珍しくスーツなんか着て！」

「嫌、此处では初心を思い出そうと思ったので」

「久々ですね、三重さん！」

「ええ、本当ですね、岡藤君」

この人は三重旭^{みえあさひ}さん。英語科の講師だ。

講師の為、ほぼ一年ごとに転勤しているのだ。

いろんな学校でバスケット部の顧問をしていてよく会うので仲良くなった。

性格も年齢も違うものの、何故か気が合うという不思議な関係だ。

「三重さん、連絡ぐらいしてくれてもいいじゃないですか！」

「ちよつとばかり驚かしたくてね」

「しばらくの間、よろしくお願いします」

「ええ、こちらこそ」

相変わらずの口調で三重さんは言った。

まさか、三重さんと同じ学校で勤務するとは…考えもなかった。

その数日後、クラス替えだった。

喜ぶ人もいれば、もちろん悲しむ人もいて、中には泣いている女子もいた。

今年は石崎が二組、多島が三組、俺が五組とバラバラだった。

「ねえ、うち、岡藤が担任が良かった！」

「今、何気にさ、岡藤って言わなかった？」

と派手なタイプの女子に言われていた。

その女子は三年連続同じ担任の先生だったらしい。

すると此処にもテンションの下がっている女子が一名いた。桐野だ。

「ううー、もう嫌、ありえん」

「誰、担任やったん？」

「……さきちゃん」

ちなみに石崎は皆にさきちゃんと呼ばれていた。

別に俺たちから見たら石崎は普通だった。

「えっ、良いやん！」

「だって…さきちゃん、嫌いやもん……」

「じゃあさ、俺が担任になってほしかったとか？」

「うん、そうだよ、先生が担任になってほしかったよ」

もちろん冗談のつもりだった。

だけど、案外素直に答えてくれた桐野。

俺はとても嬉しかったんだ。

「俺のクラス転校しにくる？」

「出来ることならしたいわ！」

そう言つて桐野は生徒会の準備に向かったようだ。

俺は今年生徒会の担当から外された。その代わりに修学旅行の担当になってしまった。

生徒会はとても忙しいようだ。入学式に始業式に離任式にクラブオリエンテーションとまだ四月なのにバタバタであつた。

クラブオリエンテーションの日を迎えた。生徒会の行事の一つでもある。

桐野は美術部であることを生かし冊子の表紙を描いた。

吹奏楽部の可憐な演奏、美術部の素晴らしい風景、科学部の楽しい実験と文化部は終わった。

次は野球部つて時だった。待っているはずの野球部がない。

生徒会のメンバーも焦つていて、次の女子バドミントン部に行つていた。

「ほんま、野球部何してんのよ！」

桐野も怒りと焦りが混じつた声で言つた。

そして、進行に合わせていろんな部活を呼んで静まらせたりと本当に大変そうだった。

「生徒会、忙しそうですね」

「本当に頑張つてますから」

三重さんは呑気にそう言つた。

本当に気楽に生きてそんな人だなんて思う。

もちろんクラブオリエンテーションの場には多島もいた。

桐野の視線はいろんな部活を見ながらもちよつとだけ多島を見ていた。

気づけばクラブオリエンテーションが終わつていた。

俺と三重さんの近くに生徒会のメンバーが集まつていた。

そして、俺と三重さんは笑いながらコソコソと邪魔にならないように喋つていた。

目の前に桐野と生徒会の副会長男子がいて何か俺らのことを話しているようだ。

「何喋ってるねん」

「だって、後ろの二人怪しすぎるから」

「聞かんというて」

「聞こえてますけど」

相変わらず冷めたツツコミをする桐野。

だが、桐野はずっといつものように笑っていた。

もちろん三重さんも笑っていたのだった。

「知ってた？三重先生は。×市内の中学校に恐怖を与えてるねんで？」

「そんなわけですよ！」

「先生もあんま大差ないからな」

俺たちは爆笑していたのだった。

すると石崎が「生徒会の人集合！」と言った。

「育、行きや」

「呼び捨て止めてや！」

そう言つて、あかんべーをして桐野は石崎の元に行った。

桐野のあかんべー可愛かったな…

「あの子の名前は何ですか？」

「桐野育です、三年生の子ですよ」

「そうですか、あの子と仲良いんですね」

「ええ、まあ……三年間接してるんでね」

珍しく三重さんは生徒に興味を示したようだ。

しかも、三重さんは二年担当だったが三年の生徒にだ。

その時は気づけなかった。

これからの運命を左右していたのかもしれない。

20・決心 - k i s s -

僕はおまえが好きだった。そして今でも好きなんだ。

たとえ世界が木っ端微塵になったとしても、その残骸の破片から、恋の想いは炎となって燃え上がる。

by ハイネ『歌の本』

四月に入って数十日が経った。もう五月になりそうだった。

俺は全然桐野と喋っていなかった。桐野を見ることはあっても喋る機会はなかった。

俺は放課後にクラスの掃除をしていると桐野は現れた。クラスには若干名いた。

「久しぶりやね、先生！」

「うん、けど、俺よく見んで？」

「先生、あのさ」

俺は桐野が口を開くのを待っていた。

何を言うんだろう。そんなじらしなんていらないから。

「私ね、岡藤先生に会えなくて寂しいよ」

「えっ……」

君は真剣な眼で言うものだから少し驚いてしまった。

俺、どうしたらいいんだよ。また君を好きになってしまっじゃないか。

「そう言ってくれるなんて嬉しいよ、ありがとう」

そう言くと君は笑った。

どうして、君は俺に『寂しい』なんて言うんだ。

別に俺は好きじゃないんだろう……

「妹の方がよく見るで」

そう、桐野には二つ下の妹がいた。名前は桐野環　きりのたまき
だったかな？

だが、桐野の妹は桐野と全くと言っても似てなかった。

目や鼻の顔のパーツもそうだし、性格も大人しい印象を受けた。

桐野は美術部なのに対し、妹は女子テニス部で全然部活が違った。

「へえー全然似てないやろ？」

「うん、いつもニコニコして聞いてくれる」

「あんな猫被ってるだけ」

と桐野の本音を飛び交う中、俺たちはただ笑っていた。

「桐野！岡藤先生困ってるやろ！」

クラスにいる若干名の生徒の一人が言った。

やっぱ桐野も人間なので人目も気にする。

「後で話は聞いてやるよ」

そう言っていると桐野はホッとした顔をしていた。

「岡藤先生、今日のメニューは？」

「今日は…」

俺は部活のキャプテンに本日の部活でのメニューを言った。

その間も桐野は黙って待っていた。

そして、俺は桐野に手で「着いてこい」という動作をした。

桐野は再び俺の隣にやってきた。

「話したいことあったけど……良いや」

「なんで？」

「恥ずかしいから！」

要するに恋の話題だったようだ。

やっぱりまだ好きなんだな…多島のこと。

確かに多島は見た目ヘタレで頼りなさそうに見える。

だが、真面目で責任感があって知らないように全てを知ってるような奴だ。

そして、根はとても優しくかった。だから、君は好きになったんだろう？

「そっか、じゃあまた聞かせて」

「うん、じゃあね！」

そう言つて桐野は部活に行った。

俺はふとこのまま行けば危険なような気がした。

本気で生徒である桐野を好きになつてしまう。

それは俺自身も桐野自身も傷つけてしまう。

だけど、俺は桐野が好きなんだよ。例えば多島が好きだとしても俺は大好きなんだよ。

「だから、また付き合えないかなつて」

俺は竹中さんのあの一言を思い出した。

もう遅いかもしれない。もう忘れてるかもしれない。もう二、三ヶ月も前だ。

別に好きな人も出来てるかもしれない。けど、俺はこの方法しかきつとない。

竹中さんにある一言を言おう。

俺は職員室に行くと竹中さんのところに行った。

「五時四〇分、いつもの場所、話がある」

そう耳元で言つと竹中さんは頷いて、走つて行った。

竹中さんの顔は真っ赤だった。

「相変わらず岡藤君は女性にモテモテですね」

「まあ…多少は」

「否定しないのも君の良いところだね、ほらあの子、桐野さんにも人気じゃないですか」

何故三重さんの口から桐野の話題が出るんだろうつて思った。

それより三重さんが桐野の名前を覚えていることが俺は意外だった。

「桐野はね、やっぱ一年の時から知ってるんでね」

「ふーん、そうですか…」

そう言つと三重さんはコーヒーを飲みにも奥の場所に行った。

五時四〇分、俺はゆっくりと行くと竹中さんが階段に座っていた。

いつもの場所とは非常階段の二階だった。そこが俺らの場所だった。

「呼んだくせに遅いんだけど」

「ちよつとバスケット部のがあつたからな」

「そうなんだ……で、話って？」

ちよつとした間の後、真っ直ぐとした眼で竹中さんは言った。

我ながら決心したことだがやはり緊張する。

「あのさ、ちよつと前にまた付き合えないかって言われたじゃん」

「うん、言つたね」

「それさ、俺考えたの」

俺は自分で決めたんだ。自分自身も桐野も傷つけない最善の方法……それは……

「竹中咲さん、俺とまた付き合ってください、お願いします」

そう言うのと竹中さんはとても驚いて真っ赤な顔をしていた。

そして、俺は竹中さんを抱きしめた。

「どうですか……？」

「……もう一度やり直そう、岡藤」

また再びギュッと強く抱きしめた。

気づけばお互いの唇が触れ合っていた。

竹中さんの唇は涙の味がしたような気がした。

これで俺はきつと桐野への想いを忘れられる。そう思った。

竹中さんはこのキスは再び“想いの成就”の誓いのキスと思っていたでしょう。

このキスは俺にとっての“想いの封印”の誓いのキスでした。

21・旅行 - The first -

もしクレオパトラの鼻がもっと低かったなら、歴史の顔は変わっていただろう。

人間のむなしさを知ろうとするなら、恋愛の原因と結果とをよく眺めるがよい。

byパスカル

時は流れ、修学旅行の前日となった。

「修↘学↘旅↘行↘！修↘学↘旅↘行↘！」

職員室で三年教員達は最後の打ち合わせも終わった。

そして、石崎は子供のようにテンションが上がっていた。

教員達はほとんど寝れない修学旅行でも楽しみではあった。

俺は二度目の修学旅行だったが、多島と石崎にとって教師になって初めての修学旅行である。

「テンション上がるのは良いが、体調崩すなよ」

「大丈夫です！三年教員の元氣印 石崎茜ですから！」

「何だよ、そのキャッチフレーズ」

確かに毎日夜遅くまで仕事をしているのに石崎は元氣だった。

一番生徒のことで時間の上で仕事をしていたのは石崎だった。

結婚していて子供はいないものの、夫はよく平氣だなんて思えた。

すると横を見ると多島がてるてる坊主を作り、飾っていた。

「多島、何してんの？」

「明日は雨らしいんで」

「そうなんか、晴れたらいいのにな」

本当に「女子か！」って突っ込みを入れたくなった。

そして、多島はすぐにパソコンを立ち上げてビデオレクの作業をしていた。

多島はビデオレクを担当になってしまい、修学旅行前日だというの

にまでやっていた。

そして、俺はそんな多島を見ながら職員室を後にした。

丸山中学校の修学旅行は二泊三日でバスで四時間もかかる場所に行くのだ。

一日目は生徒たちは農家に泊まり、農業体験をする。だが、それは教師は多少の見学はするもののほとんど生徒たちだけの行動だ。なので教師はホテルに泊まり、一日いろいろと過ごす。

二日目は午前中は農家で過ごし、午後は川でラフティングする。夜は普通にホテルに泊まる。

三日目は帰りつつもバスで二時間ぐらいのところのテーマパークに行く。

結構イベントが盛り沢山で楽しい修学旅行になりそうだ。

修学旅行当日になった。多島がてるてる坊主に託した祈りも虚しく天気は雨である。

職員室で教員達は最終チェックをした。

突然、俺の携帯電話にメールの着信音が鳴った。

携帯電話の液晶画面には『三重旭』と書かれていた。内容を見ると……

『おはようございます、三重です』

今日から岡藤君は修学旅行ですー羨ましい。

多分クタクタになるでしょうが頑張ってください

後、お土産買ってきてください』

その『後、お土産買ってきてください』の後に『丁寧に絵文字でハートまで入れていた。

目的はお土産を買ってきてほしいだけなんだが……

俺は『分かりました。買ってきます』とだけ送った。

竹中さんにも『お土産、何買ってきてほしいですか?』とメールを送った。

今日は日曜日だし、確か部活もないみたいだからゆっくり寝てるんだろうなって思った。

時計を見ると集合時間である七時三十分まで後五分である。そろそろ行かないといけないと思い、俺は急いだ。

「並べ! 出欠確認するから学級委員並ばしてくれ!」

そして、クラスの学級委員は先頭に立って順に生徒たちを並ばせる。どんどん時間は迫ってきて一分前になっても生徒は走ってやって来る。

本当に修学旅行に行く気あるのかよって思いながら俺は待っていた。そして、七時三十分になった。学級委員長の挨拶、校長先生からの挨拶、そして、最後の最後まで注意をして一組からバスに乗った。

俺も自分のクラスのバスに乗り込み、バスの座席に座るとバスは動きだした。

するとマナーモードに設定した携帯電話からバイブ音がかすかに鳴った。

液晶画面を見ると『竹中咲』と書かれていた。俺はすぐさまメールを見た。

『おはよう、岡藤。』

今日から修学旅行だな、楽しんで来いよ

お土産は岡藤お薦めのにしといて

後、ご当地キティちゃん買ってきて

それじゃ、また寝る。おやすみ』

いつものように絵文字が少ないメールだった。

要するにご当地キティちゃん買ってこないといけないんだなっと思った。

俺の二回目の修学旅行はまだまだ始まったばかりだ。

22・相談 - The Second -

やりかたやハウツーなんてない。ただ愛することによってしか、愛し方なんてわからないんだ。

b y オルダリ・ハクスリー

俺のクラスのバスではバスレクをしていた。

ビンゴやクイズなどいろいろしていた。

もちろん景品も用意されていて大人であることも忘れ必死になった。そして、多島が一生懸命作ったビデオレクも流した。

そのビデオレクの途中にバイブ音が鳴った。しかも、電話である。表示を見ると『石崎茜』と表示されていた。

「石崎、どうしたんや？」

「ビデオが表示されなくてねーそっちは映ってる？」

「映ってるよーええやろ」

「はいはい、それじゃあ、また後で」

と言って電話を切られた。自分から電話してきたのに勝手な奴だ。ビデオレクは先生たちの鼻歌で曲を当てるイントロクイズがあった。少し鼻歌じゃないのも混じっていたけれど…

他には子供時代の写真を見て先生を誰だか当てるクイズもあった。正解を知っている俺でもやはり意外性が大きい。

石崎の子供時代の写真や、なんとあの竹中さんも子供時代の写真まで用意されていた。

しかも、竹中さんの子供時代の写真は今とは全然違い、凄く女の子らしくて可愛かった。

「えー！あれ、竹中先生！？」

「めっちゃ可愛くない？」

生徒たちが竹中さんの子供時代の写真がビデオレクで一番反応が大きかったように思えた。

その他にも三〇歳までの先生を集めた年齢並び替えクイズもあった。参加者は三重さん、竹中さん、綾瀬さん、数学科の二宮君、石崎、多島、保健体育科の東山、俺だった。

そして、俺が出てきたときに生徒たちは「笑顔が気持ち悪い」と批判の声が続出だった。

バスが盛り上がっているうちに気づけば四時間が経って現場に着いたのだった。

四時間経って着いたはいいが雨はザーザーと降っていた。むしろ出発した時よりも雨が強くなっていた。

まずは昼ご飯を食べてから、一時間後ぐらいに遠いところからバスで出発する。

俺は添乗員さんと話したり、他の教員たちとも話さなければいけないことを話した。

そして、俺は生徒たちの監視役を地味にしていた。

するとトイレに行った後の桐野と会った。手にはカメラがあった。

だが、桐野は他の他クラスの友達や別の先生と撮っていた。

集合時間になっているんなクラスの子がバスに乗り、遠い村まで農業体験に行く。

もちろん近いところだったらすぐそこなのだが遠い村まで行く子は本当に可哀想だった。

遠いぶんだけ自然も多いし、本当に農家らしいことができるかもしれないけど……

俺たちは近くの村の農家で一時間ほど体験して俺たちはバスでホテルに行った。

ホテルは明日生徒たちと泊まるホテル一緒だが少しだけ部屋が良くなった。

さすがに一人一部屋ってわけでもなく、同性の二人で一部屋だった。俺は多島と同じ部屋になった。しかも、明日も多島と別の部屋に泊まるのだ。

別に嫌ではなかった。先輩のお偉い上司さんと同部屋で泊まるよりはよっぽど良かった。

夕方までは三年教員でせっかく四時間掛けてきた場所なので観光を楽しんだ。

名産物を食べたり、観光地に行ったりと何かと楽しんでいた。

周りから見たらちよつと多い家族にも見えたかもしれないがさすがに教師だとは思わなかっただろう。

そして、俺は竹中さんや三重さんや家族などへのお土産を買っておいだ。

観光を楽しんだ後は多島とホテルの温泉に行った。やはり疲れを洗い流すのは温泉に限る。

「良い湯だな、多島…」

「そうですね、岡藤さん」

お互いバスで四時間かかった疲れや様々な緊張から一気に解放された。

しかも、運がいいことに温泉にはほぼ二人で占領していた。

「……………なあ、多島」

「何ですか？ 岡藤さん」

「お前さ、好きな人いんの？」

「えっ！ちよつ…！嫌、その…えっ！」

あまり教師の間ではそんな恋愛話をしない。雰囲気で付き合ってるのは読み取るものだ。さすがに結婚の際は報告するけれど。

多島とはあまり恋愛話はしていなかったので、この際聞いてみようと思ったのだ。

「いるみたいだな、その反応は…誰？」

「別に誰でも良いじゃないですか！」

「まあな……恋の相談は乗ってやるよ」

「岡藤さんこそ彼女とか出来たでしょう？」

「やっぱ竹中さんとヨリ戻したんですね」

たまに多島は勘が良かった。特に無駄なところだけは…

竹中さんからいろいろと話を聞いていたのかもしれない。

「どうやって戻したんですか？」

「非常階段呼び出して『また付き合おう』って言ってそんな感じ」

「何か聞いてる方が照れますね」

そんな話をしながら俺たちは温泉を出た。

そして、俺たちは浴衣に着替えてドライヤーで髪をさっと乾かした。

「そうだ！竹中さんに貴重な浴衣の岡藤さんの画像送ったらどうですか？」

「けど、俺、部屋に携帯置いてきた」

「俺のがあるんで撮ってあげますよ！俺のから送ったほうが驚きますでしょ？」

そう言われ、俺は多島の言うがままに浴衣の写真を撮られた。

何故か俺と多島のツーショットで写真を撮り、すぐに多島はメールを送った。

そして、俺たちはすぐさま部屋に戻り、宴会場に行った。

すると浴衣姿の三年教員がほとんど集まっていた。

「遅いよ！たっじーと岡藤さん！」

「ごめんごめん！ついつい話が長くなって」

「どうせ、そんなことだろうと思った」

そして、俺たちの宴会が始まった。

モノマネや宴会芸、マジックといういろいろしていた。

もちろん酒も飲みまくっていた。だが、俺はあまり酒が飲めないので飲まなかった。

三時間も経つと酒を飲んでいた先生たちは酔いつぶれていた。

多島は見事に出来上がっていて歩くのも大変そうだった。

多島はとても酒が弱いのによく飲むのだ。

しょうがなく、多島を背負い、部屋まで連れて行った。

二十五歳の大人が上司に背負われているってどんな光景だよ。

しかも、俺と多島は5,6cmしか身長は変わらないから重たくて仕方がなかった。

やっと部屋に着くとご丁寧に布団が引いてあった。

「水、下しゃーあい」

「はい、どうぞ」

多島に俺は水をあげた。しかも、呂律が回っていない。本当にどつちが上司だか部下だか分からなくなる。

「ねえ、岡藤ちゃん…温泉に行った時言っていましたよね？」

「何をだ？」

「恋の相談乗ったるぞーって」

「うん、言ったな」

「俺の恋の相談乗ってほしいんですよー」

多島は泥酔状態でそんなことを言い出した。

こんな泥酔状態で言うことなんて聞いてられるかって思った。

「その相談は何なんだ」

まさかさ、多島が本当にこんなことを言うなんて思ってもなかったんだ。

「俺ね、桐野が好きかもしれにやいんです…」

俺はその瞬間、多島が水を飲んでいたコップを落とした。

俺はどういえばいいのか分からなくなった。

何故、恋は突然変異するんですか？

23・複雑 - The third -

愛情には一つの法則しかない。それは愛する人を幸福にすることだ。
byスタンダール

「……多島……何時からだ、何時から好きなんだ？」

「うーん………気づけば好きになってたんですー！」

俺は額に冷や汗が流れた。そして、身体が震えていた。

電気も少し暗めで多島は泥酔状態で虚ろな状態だから見えていないだろう。

「ねえ、岡藤ちゃん………この気持ちどうしたらいいですか？」

「……………」

「いけないことだつて分かってるんです、けれど好きな人は好きなんです」

俺は黙って話を聞くことしか出来なかった。気づけば多島は寝ていた。

「くそっ！」

桐野は多島が好き。それは二年の冬から知っていた。

そして、一方の多島も桐野が好き。それはついさっき知ってしまった。

お互いがお互いが好き。それが二人の幸せのはずだ。

俺は桐野を諦めたはずだった。忘れたはずだった。

今、竹中さんと再び付き合い始めたばかりじゃないか……………

なのに、何故こんなにも胸が痛い…頬には自然と涙が伝っていた。

俺は布団に潜り、声を押し殺すように泣いた。

きつちりと六時にセットした携帯電話のアラームは俺の耳元で鳴り響く。

俺は顔を洗い、タオルで水気を拭き取ろうとした時、ふと鏡を見た。

やっぱり泣いた為か眼が腫れていた。俺はいつも以上に顔を洗った。誰にも気づかれたくなくて、そして、何より多島に気づかれなくなかった。

大分腫れが治まったところで再びタオルで水気を拭き取っていると多島は起きていた。

すると鏡越しで見ると後ろで頭痛薬を飲んでいるようだ。やはり飲みすぎたようだ。

「おはようございます、岡藤さん」

「おはよう、多島」

俺は髭を剃ろうとしてシェーバーで髭を剃った。

多島は先ほどの俺と同様に顔を洗い、タオルで水気を拭き取っていた。

「昨日言っではいけないようなことを言っただような気がするんですけど」

「さあ、どうでしょうね」

「本当に教えてくださいよ！」

俺は少し悩んだ。この一言を言ってもいいのかどうかに。

だけど、言っただろうが多島の為になるのか？

本人は言っただけつもりでいて俺が知ってるっていうのは悪い気がした。

俺は多島の耳元まで行った。

「お前、本気なのか？」

「何がですか？」

俺も多島もつい小声になってしまった。そして、俺は息を呑んだ。

「桐野のこと、好きなのか？」

そう言っただけ多島はただ黙っていた。

たった男二人の部屋、沈黙の重たい空気が流れていた。すると多島はこの空気の中で口を開いた。

「…………俺は桐野が好きです」

今まで見たことないような真剣な眼で、真剣な口調で多島は言った。俺はその言葉で「桐野を本気で想っている」と思った。

「頑張れよ、多島」

「えっ？」

「俺は多島が桐野を好きであれ、誰が好きであれ応援するから」今の俺には彼女もいる。この恋に参戦する権利はない。

だから、俺は多島の恋を応援したいと素直に思った。

「けど、俺は生徒が好きなんですよ？」

「恋は、自由だ」

そう言っただけ俺たちは朝食食べに行った。

朝食は和食だったけど全体的に冷めていて失礼だが不味かった。

そして、朝食を食べ終わると生徒たちを迎えに行かなければならぬ。いい。

昨日と同じ集合場所にバスで行った。

集合場所に着いたのはいいが何時間も待たなきゃならなかった。

「午後からですよ！ラフティング！」

「多島はお前は嫌味を言いたいのか？俺は出来ないの！」

多島は子供みたいにテンションが上がっていた。

俺はラフティングが出来ない。もちろん技術的な問題じゃない。

俺は修学旅行担当の教師で仕切っていかねばならないのだ。

だから、今回は本当はしなかったラフティングを断念した。

人数上の都合で教員全員は乗れないものの、四人は乗れるのだ。

上司である国語科の麻生さん、英語科の滝井さん。そして、石崎と多島がラフティングが出来るのだ。

何故このメンバーかというと修学旅行担当の教師を除いてじゃんけんをした結果らしい。

俺はそれを聞いて「なんて適当な決め方なんだ…」と思っていた。

気づけばファームステイしていた生徒たちも帰ってきていた。

そして、ちょっとしたレストランで昼食を食べて、お土産を買った。

「いつてらっしゃーい！」

俺は生徒と一部の教員を見送り、再びバスに乗った。

集合地点に先回りしておくためである。俺は携帯電話を開くと竹中さんよりメールが来ていた。

『ごめん、返信遅れた。』

多島から送られてきた

浴衣写真はなんやねん！

多島は意味分からんわ。

別にこの写真送らんでも良くない？

相変わらず岡藤は男前やから

久々に良い目の保養になった。

ありがと。多島にもそう伝えといて。』

って見てて若干恥ずかしいメールだった。

竹中さんはメールならこんなに可愛いと言えるのに…

そんなところも可愛いなと思いつながらニヤニヤと見ていた。

集合地点に着くと十分後には数台のボートが帰ってこようとしていた。

その数台の中には桐野がいた。俺は一発で桐野だって分かったから写真を撮った。

そして、桐野のボートが戻ってきた。

「お疲れさん！」

「さっき写真撮ったでしょ？」

「まあねー」

桐野にやっぱり気づかれていたようだった。

そして、桐野は「もうなんで!？」と若干怒り気味だった。すると写真屋さんが俺らのほうに近づいていた。

「ハイ、チーズ!」

俺らはピースをして、2ショットで写った。

桐野も機嫌を取り戻し、笑顔で写っていた。

数少ない桐野と俺の写真の1枚になった。

俺も桐野も二人で写っている写真はいつも笑顔だった気がする。嫌、本当に桐野はいつも笑っていた。

俺の前でも、多島の前でも。

あの人が奪うまでは。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3857g/>

Bitter Sweet Chocolate Coffee

2010年10月8日13時32分発行